

「心の教育」学習資料集

中学校編

京の子ども

明日へのびら

京都府教育委員会

京都府教育委員会

とびらを開けて

とびらを開けよう

とびらの前で立ち止まる

いつも とびらの前に立つ

わたしを呼んでる声がする

わたしは今日まで

ずっと「わたし」で生きてきた

そのわたしに向かって

「もうひとりのわたし」がささやく

あなたはこれからどう生きるの…

どんな人間を目指しているの…

わたしは返事に困ってしまう

そんなに深く考えたことはない

十年あまりの人生だけど

わたしの周りの この社会

喜び 悲しみ 満ちあふれている

幸せを望まない人はいないから

みんなの幸せ 見つけたい

さあ「明日へのとびら」を

この手で開けて

昨日よりも ひとまわり

大きな自分を創つくってみよう

きょう
京の子ども
明日へのとびら
中学校編

目次

○第一部

1	長寿国・日本とは？	山折哲雄	4
2	君の胸にも勲章を	伊藤謙介	8
3	生きていくを よく見て考えよう	中村桂子	12
4	人道の輝く世紀を目指して	上田正昭	16
5	医者という仕事ー人間の病と健康を見つめてー	澤田 淳	20
6	そして今日もまた	向山ひろ子	24
7	友達をつくるー傷つくことを恐れすぎないー	梶田真章	26
8	善き思いを抱き、善き行いをする	稲盛和夫	28
9	音楽と人の心	廣瀬暈平	32
10	シンパシー(共感)をたいせつに	村田純一	34
11	ライフワークー映画の魅力ー	龍村 仁	38
12	わたしと自然、自然な自由	西島安則	42
13	母なる自然の恵み	河合雅雄	46
14	ぼくのだいすきな日本	久木久代	50
15	国の言葉と文化ー日本語と韓国語ー	曹 承鉉	54
16	一期一会の教えー平和への祈りを深めるー	千 玄室	58
17	道徳の源は母心	梅原 猛	62
	心の広場		66
	府民ほっとメッセージ(1)		67

○第二部

1	わたしのできること	70
2	命のたいせつさ	72
3	弟とともに	76
4	おばあちゃん	78
5	優しさのチャンス	80
6	わたしだけの空	82
7	体育大会優勝に向けて	84
8	平和のためにできること	88
	心の広場	92
	府民ほっとメッセージ(2)	94
	京都府案内	

この資料集は

あなたが人間として、幸せに生きていくために、何を
たいせつにすればいいのか、どうすればいいのか、自分で
考え、みんなて学び合うためのものです。

第一部

第一部は、京都にかかわりのある方々が、皆さんの生き方を応援するために書かれた文を載せたページです。

*人間として生きていくうえで考えたい大事なテーマが集められています。

第一部のあとは「府民ほっとメッセージ」のページです。
皆さんを見守り、励ますために届けられた府民の皆さんの声を紹介しています。

1 長寿国・日本とは？

わたしは子どものころから病気がかりしていた。小児喘息、十二指腸潰瘍、その再発、またC型肝炎などにかかり、そのつど入院、退院を繰り返した。胆のうやすい臓にも故障があった。

手術をして十二指腸と胃の半分を切除したのが二十歳を過ぎたころ、胆のうを全部摘出したのが六十代のことだった。それでわたしのおなかは、手術のあとが二本、並行して走っている。

わたしは今七十五歳になったが、そんなに長生きするとは思ってもいなかった。せいぜい生き延びて五十歳か、と漠然と考えていたのである。

それがどうだろう。日本は今日、世界でもトップクラスの長寿国になった。男も女も、八十歳前後の年齢まで長生きするようになったのである。わたしもあと五年で、その歳になる。

ところが、この日本列島に住む人々は、長い間「人

生は五十年」と考えて生活してきた。例えば戦国時代の英雄だった織田信長も、京都の本能寺で自害して果てるとき、「人間五十年、夢まぼろしのごとくなり」といつて死んだ、と伝えられている。

その「人生五十年」がつい最近まで、ごく当たり前のこととして語られてきた。だからそれがいつのまにか、こわすか二、三十年の間に、「人生八十年」という時代になったのである。医学の進歩による健康管理や衛生思想が普及したということがあるのだろう。それで死亡率も低下した。とにかく、日本が経済的に豊かになるとともに生じた急激な変化であった。

さて「人生五十年」の時代とは、この世に生まれ、家族とともに働きづめに働いて、気がついたらもう死が足下に忍び寄っていた、という時代のことではないだろうか。人々はいつも、人間はいかにして生き、そして死ぬか、ということを考えながら生きていたので

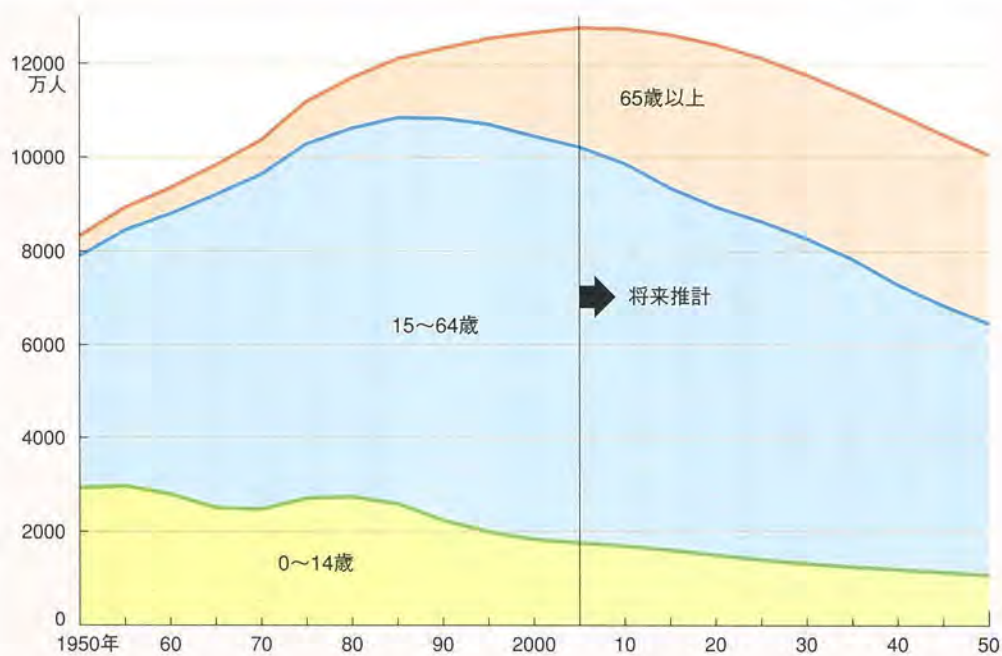
やまおり
てつお
山折 哲雄

ある。そこから自然に「死生観」とか「生死観」といったことがいわれるようになった。

ところが、人生八十年ということになると、どうなるか。現在のわれわれの社会では、多くの人々は五十年代から六十代にかけて定年という時期を迎える。それを機に社会から引退して悠々自適の生活を始める人もいれば、自分の個性に合った第二の人生を歩む人もあるだろう。だがいずれにしても、定年を迎えたあとに、まだ二十年、三十年の長い時間が横たわっているのである。

その二十年、三十年を、いったいどのように生きていったらいいのか。よくよく考えてみると、そこからは重大な問題がいくつも浮かび上がってくる。かかる。今、一口に二十年、三十年といったけれども、人間は五十の声をきくと、誰しも体が弱り、病が忍び寄ってくる。精神的な疲労もたまっているはずだ。そしてじわじわと、あの世に旅立つ日が近づいてくる。つまり老、病、死の二十年、三十年が、ゆっくり近づいてくる。

人生五十年といわれた時代においては、いかに生き、



(2005年刊「日本統計年鑑」)

▲日本の年齢別人口の推移と将来推計



▲インド・ブッダガヤの菩提樹（マハーボティ寺院）

そしていかに死ぬか、ということを中心に人間の運命を考えていけばよかった。しかし人生八十年ということになると、そのほかに、老いと病の問題を、もつと長い時間の流れの中で考えていかなければならなくなった、ということではないだろうか。人生五十年、という場合にも、もちろん老いと病の問題が存在していたであろう。しかし、このことが人生八十年の場合には、もつともつと切実な人間の課題として浮上してきたのである。

人間の運命を、生・老・病・死という観点から改めて見直さなければならぬ時代がやってきたのである。「死生観」という人生観に対して、新たに「生老病死観」という人生観が重要な意味をもつようになったのだ。

このような急激な変化の中でわたしが思いおこすのが、仏教を開いたブッダ（仏陀）の人生である。お釈迦さん、とよばれている悟りを開いた人間のことだ。ブッダは今から二千五百年ほど前に、インドのヒマラヤ山脈の南麓で生まれた。結婚をして子どももできたが、やがて家を出て、長い修行遍歴の旅に出た。ブッ

ダガヤの菩提樹の下で悟りを得たのが三十五歳のときだった。人生の苦しみや悲しみから解放されるためには、欲望のコントロールが必要だと考えたのである。

そのブッダは八十歳の長寿を全うしてこの世を去ったが、その間に休むことなく考え続けたのが生・老・病・死の問題だった。人間の悲劇も喜劇も、すべてがそのこととかわりがあり、そこからどのようなようにして自由と幸福を手にするかが、生きていく上での彼の重要なテーマになったのである。

このように考えるとき、ブッダの八十年の人生の全体が不思議な光を帯びて、われわれの眼前に迫ってくるのがわかる。なぜならわれわれの社会は、先にもいったように平均年齢がほぼ八十年の長寿社会を迎えるようになってきているからだ。しかし八十年の長寿とはいつても、現実には老いと病と死に関する困難な問題が次から次へと発生するようになってきている。いつのまにかブッダ八十年の生涯が、わが国における平均寿命八十年の高齢社会の現実を映し出す、鏡のような役割を果たすようになってきたのである。

最後に一言。織田信長とほぼ同時代の中世に、「能」

という演劇が盛んに行われるようになった。その舞台で用いられる仮面に「翁」という面がある。優しい、柔和な老人の表情をしていることに注意しよう。あの翁（老人）の表情のなかに、生の世界と死の世界を深く見つめ、同時に病を克服した人間の、成熟した姿をかいまみることができるとは、ないだろうか。

諸君、一度はこんなことも考えてみたらどうだろうか。



▲「能」で用いられる「翁」の面

2 君の胸にも勳章を

伊藤 謙介

君たちと同じような年頃——それは今から五十年以上も前、ずいぶん昔のことだけど、思い出してみよう。

朝五時、ぼくはいつものように目が覚める。

中国山地の山あいにある町の夜明けは遅く、外はまだ暗い。母が弁当をこしらえる音が台所から聞こえてくる。弁当といっても、米がなく、ふかしたジャガイモが三個入っているだけだ。でも、ふだんからイモのつるや、イナゴやハチの仔などをとって食べていることを思えば、ぜいたくは言えない。

自転車に乗って、駅に向かう。舗装されていないデコボコ道が三十分も続く。貧しい農家の子どもにバスに乗るお金はなかった。バスがまきあがる猛烈な土ほこりの中を、むせながら懸命にペダルをこぐ。

駅で汽車に乗りかえる。一時間ほど揺られ、学校最

寄りの駅に着く。ここでもバス代はなく、二十分ほどかけて、徒歩で学校へ向かう。

ぼくは学びたい一心で、このような長時間の通学にも貧しさにも、「負けるものか」と、いつも歯を食いしばっていたように思う。

春一番が吹き荒れる春の日も、キラキラと太陽が照りつける夏の日も、強風が舞い雨がたたきつける秋の日も、山道に小雪が舞う凍てつく冬の日も、ぼくはこのようなにして毎日二時間ほどかけて、学校に通い、一日たりとも休むことはなかった。

放課後も、ぐずぐずしてはいられない。日は短く冬はすぐに太陽が西に傾き、でこぼこ道を自転車をこいでいるときには、いつも真つ暗だった。

ただ、山あいに立つ家の灯りがほのかに見え始めるときには、学校に通えること、また何とか食べていけること、そして生きていることにさえ感謝する思いが



わいてきた。

なぜなら、いつもぼくの頭の中を、懸命けんめいに働く母の姿がよぎったからだ。前の晩いちばん遅く寝たにもかかわらず、朝の四時から起き出して、井戸いどから水をくみ、かまどに火をくべて、五人の兄弟全員の朝食の支度たくから弁当の用意まで一人でしてくれた。そんな母のことを思えば、いつも「明日もがんばろう！」と、心に誓ちかうことができた。

ぼくの家だけではない。昭和二十年代は、ほとんどの人がそのような環境かんきょうの中で育った。しかし、そんな日々が人生を生きていくうえで、ほんとうにたいせつなものを与あたえてくれ、教えてくれた。

ぼくを例にとれば、まずは頑健がんけんな体をつくってくれた。病気らしい病気もせず、仕事に打ちこむ人生を送ることができたのも、毎日の通学を通じて、健康の基礎きそとなる体力をつくることができたからに違ちがいない。

また、「忍耐にんたい」も養われたように思う。天候だけでなく、人生では自分ではどうしようもない困難にさらされることもある。そのようなときに、泣き叫なげんでもどうしようもない。ただただ、じっと歯を食いしばり、

耐たえながら乗りこえていくことを学んだ。

嵐あらしがいつまでも続くことはない。吹き荒あれる風雨に負けることなく、じっと耐えぬき、さらに努力を重ねていけば、嵐の後の大空に七色に輝あやく虹にじがかかるように、人生では必ずすばらしい幸運にめぐりあうことができるのだ。

また、つらく苦しい生活の中で、少しは「意志」を強いものにすることができた。自分が学校に通かようと決めた以上、何があるうが、絶対に負けたくなかった。体調がすぐれないときなど、ついへこたれそうになるが、そのたびに「負けるな！」と自分を励はげましてきた。そんなとき、自分が学校へ行かせてもらっていることに思いをせれば、感謝の思いが心にしみ入り、不屈くつしの闘志とうしがふつふつとわいてきた。後に仕事に就ついたとき、困難な状況じょうきょうであればあるほど、「絶対に負けな

い」という気概きがいをもって立ち向かう、基本的な姿勢しせいを育はぐんでくれたように思う。

また不思議なことに、いかに困難な状況であっても、強い意志をもって、また感謝の思いをもって臨のぞめば、必ず幸運の女神めがみがどこからか現れ、人生はすばらしい

方向へと向かい始めた。この世の中は、逆境の中でひたむきに努力を続ける人を絶対に見捨てない。必ず救ってくれるようにできているのである。

ぼくの自慢ではない。戦争後を懸命に生きぬいてきた、すべての日本人が、苦勞に苦勞を重ね、その苦勞を克服していく中で、豊かな人生を生きる上で、またすばらしい社会をつくるために必要な、たいせつな「知恵」を身につけていった。

それが、「感謝」や「忍耐」、「努力」、また「意志」なのだ。そして、今の豊かな日本は、そのような「苦勞」を通じて得た、いわば汗と涙の結晶をベースとしてできている。このことを、君たちに知ってほしい。

もちろん、時代や環境が異なる、現代を生きる君たちに、同じ苦勞を体験してもらうことはできない。昔のような食べる苦勞、生きる苦勞は、現代ではもう少ない。しかし、今の君たちには、現在の豊かな社会が生み出した新たな苦勞があるのだから。

ただ、時代とともに苦勞のかたちは変わろうとも、苦勞に打ち勝つために必要な心構えに変わりはない。いつの時代であれ、苦しければ苦しいときほど、「負

けるものか」、「もっとがんばろう」、そして「ありがとう」という思いをもって、生きることがたいせつだ。生きることが、必ず苦勞を伴う。そんな人生に、「忍耐」と「意志」をもって真正面から立ち向かい、「感謝」しつつ、もっと「努力」を重ねることで、必ず苦勞を克服することができる。そのとき、君の胸には勲章が輝いていることだろう。



この人生の勲章を、一つでも多く君が胸にすることができれば、必ずすばらしい人生が待っている。このことを信じて一生懸命に生きる君たちの人生に、幸多からんことを――。

3 “生きていく”をよく見て考えよう

「生命尊重」。すばらしい言葉です。だれもこれに反対する人はいないでしょう。生命をたいせつなものだと思わない人はいないでしょう。それなのに、わたしたちが暮らす社会では、ほんとうにわたしたちは生命をたいせつにしているのだろうかと疑いたくなる事がらがたくさん起きています。

身近な人の生命を奪ったり、自らの生命を絶ったり。世界に眼を向ければ、戦争で生命を失う人が少なくありません。せっかく生まれてきて、これから思いきり生きようとしている赤ちゃんが暮らす家に爆弾を落とすなんて、生命を何だと思っているのだろうかと思いません。

ここで、「生命尊重」と言ってみても、何も解決しません。いったいどうすれば生命をたいせつにしたことになるのか。そこから考えなければ、何をしてよいのかがわかりません。生命って何なのだろう。それを

たいせつにするってどういうことなのだろう。ところが困ったことに、生命とは何かという問いには答えがないのです。あなたたちが、まだ知らないのではなくて、だれにもわかっていないのです。昔からおおぜいの人々が、生命とは何かということを考えてきました。自分の考えを本に書いた学者もたくさんいます。でも、これぞという答えはありません。

実は、生命とは何だろうということは、一人一人が考えてみるのが大事なのではないか。わたしはそう思っています。だれかに教えてもらうのではなく、自分で考えるものなのだと思うのです。だから、あなたにも考えてほしい。今さらそんなこと言われなくても、自分で考えてるよ、という人もいるでしょう。でもなかには、そんなこと言われたって、何をどう考えたらよいかわからないという人もいるかもしれません。そこで、参考にしてもらうために、わたしが考えている

なかむら
桂子

ことを書いてみようと思います。

生命いのちと言われてもなんだか難しい。わたしもそう思いました。生命いのちはこういうものですと見せられるものでもないし、どうしよう。あれこれ考えているうちに、生命いのちは見えないけれど、“生きている”は見えるということに気がついたのです。イヌがしっぽを振っている、ア리가パンくずを運んでいく、ユリの花が開いた……。毎日わたしたちの身の回りで起きているこれらのことはどれも“生きている”です。もちろん、わたしも生きています。人間も含めてあらゆる生きものが生きている様子をよく見つめ、生きているってどういうことなのだろうと考えてみよう。それがわたしの仕事になりました。

生きものを見てみると、まず気づくのは、なんていろいろないるんだろうということ。その生き方もさまざまです。しかも、それを自分の眼めで見ると、必ず発見があるのがおもしろい。今朝、花に水やりをするために庭に出たらとても立体的な大きな木の巣あながありました。真ん中にいるのは、脚あしは、黒と黄色の縞しま、体には赤も見えます。くもの巣あなといえば、平たい網あみ

ようなものと思っていたのに、なんて複雑なマンションみたいな巣だろう。早速調べてみたらジヨロウグモとわかりました。また夕方見てみようと思ってみています。明日もまた新しいものに出会えるかもしれません。

地球上には数千万種もの生きものがおり、それぞれ特徴とくちょうのある暮らし方をしていますが、“生きている”という点では共通です。すべての生きものに共通なものは何か。長い間探し続けてきた人々は、今から百数十年前に、顕微鏡けんびきょうで見ると、どの生物も細胞さいぼうでできていることを発見しました。その後、その中には必ずDNAという物質があり、それがそれぞれの性質やはたらき方を決めていることもわかりました。細かいことはここでは省はぶきます。ただ、数千万種もある生きものが、偶然ぐうぜんに同じものでできているとは考えにくいですね。調べた結果、三十八億年ほど前に生まれた細胞が地球上の全生物の祖先と考えられることがわかってきました。つまり、イヌもアリもユリもわたしたち人間も祖先を一つにする仲間なのです。

この事実は、とてもたくさんの方々に教えてくれま

す。まず、生きものにどれか三十八億年という歴史があつたからこそ、ここにいてということ。あなたが今ここにいてのは両親がいるから、そのまた両親がいるからというふうにさかのぼっていくと三十八億年の昔に戻ります。もちろんイヌもアリもユリも、生きものすべてが同じ所に戻る。生きものを見るときは、それを思ってください。三十八億年。日常考える、一時間や一年という時間の長さに比べたらなんと長い時間でしょう。でも、あなたの眼の前を歩いている小さなアリも、三十八億年という時間を体の中にもっているのです。生きていてすごいことだと思いませんか。この長い時間のつながりを思い浮かべることが生きていくことを大事にしようという気持ちを生み出していくのではないか。わたしはそう思っています。

これはまた、もう一つのつながりも教えてくれます。前にも述べましたが、祖先は一つですから、生きものは皆仲間。かわいがっているペットなら仲間と思っているかもしれません、ミミズやキノコも仲間とはあまり思っていない

いでしょう。こんなに違っているのに仲間、仲間なのそれぞれ形も暮らし方も違っている。そこが生きもののおもしろいところです。

長い長い時間、地球上にいるすべての生きもの、このような大きな広がりの中でつながっているのが生きものの特徴です。生命をたいせつにすることは、このつながりをたいせつにすることと考えるということ、思います。どんな小さな生きものも、遠くに暮らしているよその国の人たちも、みんな自分とつながっているという気持ちもたら、学校でいっしょに生活している先生や友達とはもっと強いつながりを感じることができるとしよう。

でも、ちよつと断つておかなければならないことがあります。生きものはすべて、いつか生命を失うものでもあるということです。それだけでなく食事をすると、必ずほかの生きものの生命をいただくことになり



ます。たいせつにするといいながら、生命あるものを食べなければ生きていけないのです。複雑ですね。食べないわけにはいきませんから、いただきます、と言って、生命のつながりを感じながらいねいに食べるのが大事でしょう。

生きているということはこのように、とてもすばらしいことでありながら、面倒なことでもあります。だから、自分で考えて続けていかなければならないのです。考えるとなるほどと思うことが出てきます。ぜひ自分になるほどと思うことを探してください。そして生きることをたいせつにしましょう。



▲生命誌絵巻(橋本律子 画) 著者の考えをもとに作成されたもので、多様な生きものが長い時間の中で誕生した様子を表しています。

4 人道の輝く世紀を目指して

上田 正昭
うえだ まさあき

いのちの尊厳を自覚し、人間が人間らしく、自然と調和して幸せな暮らしを営んでいく、その行動と実りが人権文化です。この人権文化という言葉は、一九九四年十二月の国連第四十九回総会が採択しました「人権教育のための国連十年」の宣言の中で、初めて使われました。

人権文化について国連は「普遍的な人権文化」を強調しましたが、人権文化には国際的に含意され確立された「普遍的な人権文化」のほかに、地域に根ざした日常の生活における「日常の人権文化」があります。自分自身の個人の尊厳ばかりでなく、ほかの人々の尊厳を犯すことなく、その尊厳をあらゆる社会で確立するための方法と手段を生涯にわたって学ぶことが人権の学習ですが、そこで学んだ知識を家庭や学校そしてそれぞれの地域で活かしてゆくことが必要です。

人間は自分の力だけで生きていくわけではありませ



ん。人間には必ず両親があり友達があり、まちやむらの地域の人々との交わりがあります。そして人間は自然の中で生きています。人間は空気を吸わずに生きることも、水を飲まずに生き抜くこともできません。人間は自然によって生かされてきたといっても過言ではないでしょう。

古代でも中世でも、人間は自然の力をあがめ、自然の力を恐れ慎み、自然と調和して生活を営んできました。ところがだんだんと、人間が万物の霊長であるとうぬぼれるようになり、近世さらに近代や現代に入りますと、自然を恐れずに自然と対決し、自然を克服し、自然を破壊し、地球を汚染してきました。環境の悪化は、動植物はもとより、人類の生存そのものを脅かしています。

人間にいのちがあるように、動植物を始めとする自然にもいのちがあります。自分のいのちだけがたいせつなのではありません。他の人のいのちも自然のいのちもたいせつです。生きているものには必ず死があります。死によっていのちは絶たれます。いのちの尊さとは、死をしつかりと見つめることによって実感する



ことができます。いのちは生きることのすべての基礎になります。

戦争はあらゆるいのちを奪う最悪の行為です。人間が平和で楽しく生きるためには、自分を支えてくれているほかの人々や生きる糧を与えてくれている自然の恵みに、ここから感謝することを忘れてはなりません。漢字は象形文字ですが、「人」という文字を見てもわかりますように、斜めの画が互いに支え合っています。助け合って自然と共に生きることがますます大事な時代になっています。

他人の痛みを感じることでできる人間、優しさといわりの感性をもつ人間になることが、人間が人間らしく生きることにつながります。こうした感性は訓練しなければ身につけることはできません。人の人たる道アジアでは人道と呼んできました。二十一世紀は人道が輝く世紀であるようにと期待されています。

ものが豊かになり生活が便利にしたがつて、ところが貧しくなりました。多くの人間は自然によって人間が生かされているという根本のところを見失っ



▲「もったいない」を世界にアピールするワングリ＝マータイさん

てきました。二〇〇四年にノーベル平和賞を受賞されたケニアのワングリ＝マータイさんは、日本語の「もったいない」という言葉と出会って、「すばらしい」と感動されました。「もったいない」という言葉は、十三世紀の『宇治拾遺物語』や十四世紀の『太平記』などにもみえています。「おかげさま」という日本語は、ほかの人からのいたわりや励まし、天地自然の恵みへの感謝の言葉で、奈良時代や平安時代にも、神仏の加護や先祖の御恩を「おかげ」と称していました。

京都の生んだ心学の祖といわれる石田梅岩（一六八

五（一七四四年）は、「人の人たる道」を重んじ、心学では「このころの発明」が肝要であると説きました。平和で人道が輝くまことの民主主義の社会を構築しなければ、郷土を愛するところも、国を愛するところも育つはずがありません。

グローバル化時代の中でEU（ヨーロッパ連合）ASEAN（東南アジア諸国連合）など、国家や民族をこえた地域的連合がますます発展します。二十一世紀を生きる君たちは、いのちの尊厳を自覚し、他人の痛みを感じ、優しさといたわりの感性をもつ人間となり、このころの通い合う家庭や学校をつくって、地域に根ざした人権文化を創造する人間として活躍してほしいと念願します。そして自然をあがめ自然と共生する、自然へのすなおな態度を養うように努力していただきたいと思います。それは若い君たちへの期待であり希望です。



5 医者という仕事——人間の病と健康を見つめて——

澤田 淳

医者之家に生まれたわけでもないのに、なぜ、一生の仕事に「医者」を選んだのでしょうか。小学校へ入る前から、干支が同じでひと回り上の姉から「淳くんは、大人になると兵隊さんか、人を助けるお医者さんになるんだね。」と言われて、敬礼の真似をしたり、家の前をゲートルを巻いて銃を肩に隊列を組んで行進する兵隊さんを見ていたりしたことを覚えています。

終戦と共に、一つ目標が消えたのが小学校三年生のヤンチャ坊主のとき。四年には五十人の男女共学のクラスができ、隣に女の子が座った。初めての経験でびっくりして「えっ」という感じ。担任の先生は海軍出身で、怖そうなおこっつい身体からだのサッカー大好き先生。あだ名はライオン。放課後にはクラス全員で一つのボールを蹴り合い、先生も髪を振り乱して熱中しました。放課後がみんなの楽しい時間でした。先生は勉強熱心で、当直の日には夕方からみんな学校に集まり勉強、

その次は校内での鬼ごっこ、夜、暗くなってから、みんなを家々まで送るのが慣例になっていました。生徒の家のことをよく知っていたのはこのためかと、今、思っています。先生は「ぼくたちのこと——勉強も日常のことも——を気にしてくれている。」「守ってくれている。」と子どもも親も感じていたので、みんなから信頼され、好かれていました。先生が校長を定年退職された記念に、卒業したときの教室で数十年ぶりのクラス会を開催しました。参加者は半数以上で、その後、年一回、先生ご夫妻を囲むクラス会が続いています。今年、先生八十六歳、「こんな生徒をもつて幸せだ。」「生徒七十歳、「先生に教えてもらってよかったです。」が、お互いの思いです。参加者の年齢を足すと千歳をはるかに超えるすごい会。戦後の混乱期にヤンチャ坊主は先生みたくになりたいと先生の大きい背中を見ながら育ったのは幸せでした。



満州まんしゅうから引き揚あげてきた同級生がいて、そのお父さんは小児科開業医しょうにこで、学校の校医をされていたので、時々、健康診断や予防注射を受けていました。お母さんに厳しいが、子どもには優しい名医で有名。ちよび髭ひげを生やした「仁」の字が似合う先生でした。親同士がPTAで仲良くしていたので、先生にもたびたびお目にかかり、先生みたいになりたいと思っていました。

その後、中学から高校二年生までクラブ活動に熱中していましたが、その後、どこを受験するか、何になるかの進路を決めなければならなくなったとき、小さいころに考えていたことを、もう一度考えてみました。

①医学部、昔から自分では考えていたし、見本となるいい小児科の先生がいた、②建築科、青空の下でヘルメットをかぶって格好いい、③水産学科、魚が好きで魚の養殖ようしよくをしてみたい、の三つが出てきました。どれも楽しそうで、どれもしてみたいが、同時にできそうもない。以前から悩んだときには初志貫徹かんとくすることが習慣であったので決定。医学部学生になり、ときに出会うお手本の小児科医の話や情熱にあおられて、勉強はまじめにしました。専門科は迷うことなく小児科



を選び、研修時代を夢中で過ごしました。知識不足は患児に失礼だ、
 ときには、死につながる、と猛烈に勉強をしました。病気には朝、昼、
 晩も、日曜も祭日もない。いつでも対応できるように準備しておくこ
 とを学びました。後に、教鞭をとることになりましたが、「わたし(患
 者さん)が、診てほしいと思うような医者になってください。」とお
 願いし、「病気だけを診るな、病気の子どもの環境を含めて診ること」
 がたいせつと講義をしました。本をたくさん読んで勉強しても、生き
 て生活している患児から習うことが多いのです。多くの患児を診た経
 験・知識とそれに培われた「カン」でよい先生になれるでしょう。現
 在、研修中の若い医者たちには「砂漠に水を撒くように、知識を吸収
 している」と感じています。それぞれに合ったように利用してほし
 い。

医学は冷静に真理を追究する学問、医療は医学でわかった事実を患
 者のために温かく利用する技術でしょう。医者の仕事は、「人の体と





心」、「生きる、死ぬ」に直接的に関わるたいせつで重要な役割を担当
 します。医者として、人として社会的責任を果たさなければなりません。
 「つらいこともたくさんあります。「子どもものになぜ死ぬの?」、
 「何のために生まれてきたの?」、と考える現実に、小児科医は出会
 います。どう考えればよいのでしょうか。いつまでも考え続ける命題
 です。医学・医療だけで子どもの死を受け入れることはできません。
 哲学、宗教学、倫理学などの広範な面からの助けや社会的コンセンサ
 スが必要です。インフォームドコンセント (Informed Consent) や
 QOL (Quality of Life) という言葉が医療の世界でよく使われま
 す。前者は説明と同意、後者は生活の質、生命の質と訳されています
 が、どのようなことか、考えてほしいと思います。仕事に貴賤はあり
 ません。楽な仕事もあります。わたしは自分の子どもに「自分の一
 生は自分で使いなさい、責任も自分で負いなさい。」と言っています。
 周りにあるよい背中を見逃さないでほしい。四十年以上も小児科医を
 していますが、この道を選んでよかったと思っています。



6 そして今日もまた

「大学のゼミで必要だから『あなたの幸せって何?』というテーマで書いて。」と娘に頼まれ、今思っていることをすぐに書きました。「四十年ぐらい前のわたしの小さかったころは、人が亡くなるときは天寿を全うしたお年寄りばかりで、悲しみとにぎやかさが入り混じった不思議な光景が記憶に残っている。しかし、今はとてもつらい別れが多い気がする。お母さんの一番の願い、幸せは『順番を守ること、それは親より先に死んではいけないということ。』と書きました。」

今、わたしたちの身の回りでは、いまわしい事件が起き続けています。凶悪な殺人事件、虐待、いじめ等々。人はなぜこうまでしておぞましいことを考え、そして、それを簡単に実行に移してしまうのでしょうか。子どもたちが事件、事故に巻きこまれて命を奪われてしまう。かけがえのない子ども、代わるものなら代わってやりたいと胸の張りさける思い、悲しみできつと耐えられないでしょう。先に死んだらあかんと的叫びは親として当然の願いです。でも、わたしは身近に子を

向山 ひろ子

亡くされた方の痛々しい姿や現実を受け入れていかなければならない苦悩に接したとき、自分自身を失うほどの恐怖にあいたくない、壊れていく自分が耐えられないから願っているのではないかと押し問答しながら、まともやテレビから流れるつらいニュースに過剰に反応し、不安でいっぱいでした。

平成一八年六月六日午前0時、人工呼吸する医師の両手の甲に玉のように吹き出る汗が落ちたとき、「ありがとうございました。もうやめてくださって結構です。」と声をかけると、母の顔は穏やかな仏様の顔になりました。主人と子どもたち三人が順番に手を握りながらお別れの挨拶をし、横で泣き叫ぶわたしに「よく面倒を見てあげた、ご苦労さん。」と、主人は肩に手をかけてくれました。享年七十九歳。たび重なる脳梗塞発作による身体機能低下は、十年の歳月をかけて徐々に進んでいきました。リハビリをしてもう一度立って歩きたいとの願いから、家と病院を車椅子を押



しながら往復する生活が五年ほど続き、その後はデイサービス、ショートステイ、訪問看護とたくさんの方々にお世話になりました。何事においても強い精神力を出し続けた母に衝突することも多々ありましたが、最後の最後まで、痛いともつらいとも苦しいとも一言も言わない本当に気丈な母でした。結婚して三年目に脊椎カリエスという恐ろしい病気で離婚を余儀なくされ、長期の闘病生活から始まる四十年余りを一人で生きぬいてきた母、燃える火のような性格の母でした。十年の在宅介護中にわたしのほうが体に不安を覚えました。母は順番を守ってくれました。また、わたし自身も離れていた母と共に過ごし、最期を看取ることができたことはとても幸せでした。

しかし、亡くなった後、もつともつとああもしてあげたかった、こうもしてあげられたのにと後悔ばかりで涙にくれる日々でした。斎場の秋季焼骨灰供養法要がお彼岸さんに京都のお寺で営まれ、たくさんの方々といっしょに故人を偲びました。その折に、わたしにとって今必要とする教えに出会い、また、立ち直る機会が訪れたのです。そのときの法話の中で「わたしたちは困ったときによく神頼み、仏頼みと願いをかけますが、わたしたち自身にも生まれたときから願いがかかっている

ことを忘れてはいませんか。一番に親の願い、学校では先生の願い、職場では上司の願い等々、さまざまな人の願いがかかっているのです。人々の温かな善意の中で生かされていることに気づいてほしいのです。また、生きていく者だけじゃなく、先立った人、その人の生涯がわたしたちを導いてくれるのです。」と、語りかけるように話されました。母の生きてきた時代は戦争があり災害も何度となく経験したことでしょう。その中を無事に切り抜け、決して語ることもなかった人生の荒波にも耐え忍んでの七十九年。何があったからがんばれたのか、どんな夢や希望をもち続けたからここまでこれたのか、その母の願いや生きる姿勢を推し量るなら、順番を守るとい言葉の重さを、わたしは子としてしっかりと受け取めていかななくてはならないと思いました。親はすごい。わたしは母に背中を押してもらいました。今、仏前に家族そろってCDから流れるお経に合わせて唱和しています。だんだんと一つの声になってきました。日々誰言うことなく仏前に手を合わす姿、線香の香り、澄んだ鈴の音に母は恥ずかしそうに微笑んでいるようです。

そして今日もまた「ありがとう」と、話しかけるとから一日が始まります。

7 友達をつくる——傷つくことを恐れすぎない——

梶田 真章

人にはそれぞれ得手不得手がありますから、誰もが同じようにコミュニケーションに長けていたり、人付き合いに積極的なわけではないですね。たとえ友達と呼べる人が少なかったとしても、それはそれでいいと思います。たくさんの人と同じ合わなければいけないということは決してないのですから。

縁が整わず、これという人に出会えないことはそう珍しくありません。ですから、学生時代に一人でも一生の友達を見つけられたら、それはすばらしいことです。肝心なのは、一対一で語り合える、自分がわからなくなつたときに相談できる相手がいるかどうかだと思います。誰かときちんと向き合い、言葉をやりとりすることで、自分の考えもわかつてくるところがありますから。もし一人も友達がいないとしても、兄弟やカウンセラーの方など、自分の気持ちを吐き出せる人



が身近にいるといいと思うのです。

きちんと向き合う関係の対極にあるのが、いわゆる「メル友」のような、たわいない言葉だけでつながっている関係ではないでしょうか。相手とは深く関わらず、ほんとうは何を考えているのか知らないままの付き合い。傷つくのがいやなんだろうなと思います。自分がいちばんの親友と思っけていても、相手にとってはいちばんではなかったと知ってしまったら、たしかにショックですから。最初から



「傷つきたくないからいちばんはつくらない」ことにするのでしよう。とりあえず、気持ちのいい状況じょうきょうに自分を置いていくのですね。

しかしながら、ほんとうに気持ちのよいところというのには、自分に害おとを及ぼすようなものがあったり、危険を孕はらんでいたりするものです。環境かんきょうでもそうでしょう。すばらしい緑が広がっていて、風も穏おだやかで鳥が鳴き蝶ちょうが舞まっている。でも、ヘビやカラスや、蚊かやハエはいない。そんなことはありえないわけですから。

人付き合いにも、それに似たところがあるのではないですか。すばらしい誰かとめぐり会えて、楽しい時間を過ごしたとしても、時にその人の言動に傷つくこともあるかもしれない。それがこの社会で、人と関わっていく現実です。つごうのいいところだけを享受きうじゆして、常に快適な状態というのには、あまりに無理があるのではないでしょうか。傷つくことを極端きょくたんに恐れおそえすぎなくてもいいように思うのですが。

8 善よき思いいを抱いだき、善よき行いいをする

「心に何を描えがくか」ということほど、人生において重要なものはありません。心に描く思いによって、その人の人生がどのようなものになっていくかが決まってくるのです。

中国の袁えん了りょう凡ほんという人が書いた『陰騭録いんしつろく』という本があります。これは、今から四百年ぐらい前の本で、中国の明みんの時代に書かれたものです。日本では豊臣秀吉とよとみひでが活躍かつやくしていた時代です。

その本に書かれているのは、人間には運命があるが、その人の考え方や思いによって、その運命を変えることができるということなのです。少しその内容について触れてみたいと思います。

袁了凡は、小さいころの名前を「学海がっかい」といました。その学海少年のところに、あるとき老人が訪ねてきて、「わたしは易えきという、人の運命うんめいを占うらう学問がくもんを極きわめたも

のだ。学海という少年に、運命を伝えるようにという天命が下ったので、訪ねてきた。」と言いました。

学海少年の家は、若くしてお父さんが亡なくなり、お母さんとの二人暮らしでした。老人は母と子の二人を前に、学海が将来どんな道に進むのかを占うらいました。

「お母さんは学海君を医者にしようと思っっていますね。しかし、この子は医者にはなりません。科擧かきよの試験を受け、官僚くわんりょうとして出世していきます。」と言いました。



稲盛いなもり
和夫かずお

科挙の試験とは、中国の古い時代にあった、高級官僚になるための試験です。老人は、「この子は何歳のときに何の試験を受け、何人中何番で合格します。やがて若くして地方長官に就任します。結婚はしますが、子どもは生まれません。そして五十三歳で寿命を全うします。」と、学海の運命を話しました。

学海は「変なことを言う老人だ。」と思いながらも、その話を聞いていましたが、その後老人の言ったとおりの人生を歩んでいくのです。科挙の試験を何人中何番で合格するというのも、地方の長官になるということも、すべて老人の言っていたとおりになるわけです。

地方長官に任命された学海は、赴任した地にある、禪寺を訪ねます。有名な老師に教えを請うためです。老師とは、禪寺で長く修行を続けるお坊さんのことですが、老師は新任の長官を迎え、座禪に誘いました。

学海長官の座禪を見た老師は感心します。学海長官の座禪は、雑念や妄想のない、澄みきったものであったからです。老師は舌を巻いて、「お若いのに立派です。しっかりした修行をしてくれましたね。どこで修行をされたのですか。」と声をかけました。

学海長官は、「いえ、特別な修行はしていません。ただ思い当たることがあります。」と、少年のころに老人が訪ねてきて、自分の運命について話したことを老師に伝えました。

老人が話した運命のとおり生きてきたから、今後「ああなりたい」とか、「こうしたい」という希望はもたず、運命の命ずるまま、淡々と生きていこうと思っている、だから雑念もなく座禪を組むことができているのです、と老師に打ち明けました。

すると、それまで柔和な表情で聞いていた老師の顔が、見る見るうちに厳しくなり、「若くして悟りを開いた聡明な人かと思ったが、そんな大馬鹿者だったのか。」と学海長官を叱り飛ばしました。

「老人があなたに言ったように、人間には運命があります。しかし、運命のままに生きる馬鹿がいますか。運命は変えられるのです。善いことを思い善いことをすれば、善い結果が出ます。悪いことを思い悪いことをすれば、悪い結果が生まれます。そういう因果の法則が人生にはあり、それを使うことで運命は変えられるのです。」と言われました。

学海は、すなおな人物だけに、老師の教えに感銘を受け、寺を後にしました。そして家に帰って、奥さんに老師の教えを話しました。

「ご老師から、こんな話をいただいた。今日からは、できるだけ善いことを思い、善いことをしよう。」

奥さんも「あなたがそう思うなら、二人で力を合わせて、少しでも善いことを思い、善いことをするようにしてみましょう。」と答えました。

『陰騭録』はここで、「了凡」と名を改めた学海が、自分の息子に語りかける場面が変わります。

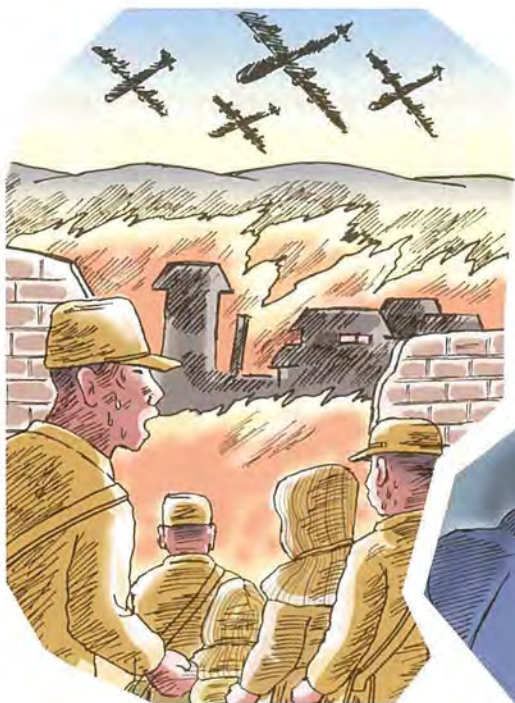
「なあ、息子よ。お父さんの人生は、今話したような不思議な人生だった。老師にお目にかかり、因果の法則を教えてもらってからは、いつもお母さんと二人で、少しでも善きことを思い、善きことをしようと心がけてきた。すると『生まれてこない』と言われていたおまえが生まれ、五十三歳で死ぬと言われたわたしが、七十歳になろうとする今も元気で生きている。」

わたしはこの話がとても好きで、よく人に話します。それは、わたしも人生とは、老師の言うとおりだと考

えているからです。

人間には、運命があります。その運命とは、人によって異なり、すばらしい運命をもって生まれてきた人もあれば、恵まれない運命を背負って生きている人もあります。しかし、そのような運命は、決して変えられないものではなく、思いや行動を変えることによって、より良いものにする事ができます。

わたしの人生も決して平坦ではありませんでした。鹿児島島の田舎に生まれ育った、何のとりえもないような少年を、さらに不幸が襲いました。結核にかかり、受験に失敗してしまつた上に、空襲で家が焼けてしまうというように、いくつもの災難がふりかかってきたのです。それが、わたしの運命であつたのかもしれない。しかし、そのような不幸な運命のもとに生まれたわたしがつুকつた会社が、年々成長を続け、今では国内のみならず、海外にも広く展開し、世界の多くの人々を雇用し、その生活を支えるまでに発展しているのです。それは、わたしがどんな困難に負けることなく、日々少しでも善い思いを抱き、善い行動をとろうとしてきたからなのかもしれません。



たいせつなことは、幸運であれ災難であれ、人生で起こるいろいろなできごとを、神様が与えてくださった試練だと考えることです。幸運であったときには、「ありがとう」と感謝の心で受け止め、さらに努力を続ける。災難であったときにも、嘆かず、恨まず、腐らず、愚痴をこぼさず、明るく前向きに、感謝の気持ちをもって努力を続けるのです。

そのようにして、良いときも悪いときも、心の中に善き思いを抱き、善き行いを続けるなら、人生は必ず好転し、すばらしい未来が訪れるものです。皆さんがこれから歩み始める人生において、そのように努めていくならば、皆さんの人生も必ず豊かで実り多いものになっていくに違いありません。

9 音楽と人の心

わたしが小学生のころ、新しく赴任された先生が、わたしたちの担任となられた。

先生の前任地は炭坑の町、先生は言われた。「炭坑の子どもたちは、幼い子を背負って学校に来る者もいる。両親が石炭を掘って働いているからだ。子どもが泣くと授業の邪魔にならないよう廊下に出る。」

炭坑の方で岩を砕くダイナマイトの音も聞こえる。しかし坑内のガスに引火したかのような大きな音が聞こえると、教室の中の子どもたちも口々に『お父さん。』と呼んで、飛び出して馳けていく。おまえたち都会の子にその気持ちかわかるか。」

またあるとき、級友の一人が転校することになり、同級生へのささやかな感謝のしるしですとあって、一人に三本か四本分の鉛筆を置いていった。われわれはもらったその鉛筆の値段についてあれこれ言い合っていた。そのとき、教室に入ってきた先生は、「人の心を金銭で計るとは何事か。」とはげしく怒られた。恐い先生ではあったが、われわれのクラス全員は次

ひろせ
りょうへい
廣瀬 量平

第に先生を尊敬し、やがて先生がいつまでも担任であってほしいと、校長先生に嘆願した。

中学生のころは戦争が激しくなり、働き手が足りなくなり、わたしたちは工場や農村で働くことになり、何か月も家を離れて働いた。

農村では二人ずつ農家に泊って仕事をした。稲刈りも、手に鎌を持つ昔ながらのやり方だった。朝、暗い中に起き、夜は星が光り始めるころまで働いた。日暮れのころ、刈り残した稲が一本でもないかと拾い歩いた。いわゆる落穂拾いである。おかげで後年、フランスの画家ミレーの「落穂拾い」、「種まく人」、「晩鐘」などをよく理解することができた。今でも食事のとき、一粒のお米も無駄にできない。

それに加えて日本で弥生時代から続く稲作を体験し、日本の伝統や歴史を実感することができた。

建設中の近代的大化学工場にも行った。当時まだ実現していなかった空気中の窒素を固定して、硝酸アン



モニウムをつくり、火薬にするという壮大な計画の中で働いた。

その工場へ物理学者アインシュタインの相対性理論の本と江戸文学の古典『南総里見八犬伝』の原文や、ベートーヴェンの書簡集を持ちこんで徹夜作業で計器を見張りながら読んだ。ある日、B 29が低空で飛来して何かを投下した。広島以前から、アインシュタインの本などで原子爆弾のことを知っていた中学三年生のわたしはひやりとしたが、それはその工場で働かされていた米軍捕虜への食糧であり、それでわたしは戦争が近く終わるのを予感した。

戦争が終わると、日本中は論争の渦となった。大学に入ってもそれは続き、わたしは次第にむなしくなった。わたしは不毛な議論でなく、いつの時代にも変わらないものを求める気持ちになっていった。

大学に進学して学んだことは、わからないことは知識でなく、納得ゆくまで「なぜ」と問い続けるということだった。それは数学にも物理学にも哲学にも、社会学にも共通していた。芸術でさえ、それがなぜ美しいのか、なぜ人の心を打つのか理由があるのを知った。真理は天体の運行のように美しかった。「自分に何がわかり、何がわからないか」を知れといったソクラテ

スや地球が動くことを証明したガリレオの利害をこえたい生き方。

さまざまな迷いの後に、わたしが選んだのは音楽だった。わたしは音楽に魅せられた。しかしすでに少年時代は終わりに近く、多くの人に無謀と言われたが、母だけが応援してくれた。

幸いなことにそのつど良師にめぐり合い、それがさらなる偶然に重なり、不可能が可能となる不思議を感じた。とりわけ「個性なんてものはない。癖があるだけだ。」とややもすれば、ひとりよがりにも傾くわたしを甘やかせることなく基礎をたたきこんでくださった先生。「どんなに遅れてもあせってはいけない。」と言われた先生。おかげで、今世界じゅうどこへ行ってもひるむことなく仕事ができるのがうれしい。

今わたしは小学校以来の師の指導や、共に志を語り合った友達に感謝し、日本に伝わるかけがえのないものをたいせつにし、世界人としても必要とされる仕事をこれからもしていきたい。そして言葉以上の言葉である音楽を通して、多くの人々の心を結びたいと願っている。

10 シンパシー(共感)をたいせつに

三人の親子

千家 元磨

或年のお晦日の晩だ。

場末の小さな暇さうな、餅屋の前で

二人の子供が母親に餅を買ってくれとねだつてゐた。

母親もそれが買ひたかつた。

小さな硝子戸から透かして見ると

十三銭といふ札がついてゐる売れ残りの餅である。

母親は永い間その店の前の往來に立つてゐた。

二人の子供は母親の右と左の袂にすがつて

ランプに輝く店の硝子窓を覗いてゐた。

十三銭といふ札のついた餅を母親はどこからか射すうす明りで

帯の間から出した小さな財布から金を出しては数へてゐた。

買はうか買ふまいかと迷つて、



むらた
村田 純一

三人とも黙つて釘付けられたやうに立つてゐた。

苦しい沈黙が一層息を殺して三人を見守つた。

どんよりした白い雲も動かず、月もその間から顔を出して、

どうなる事かと眺めてゐた。

さうしてゐる事が十分あまり

母親は聞えない位の吐息をついて、黙つて歩き出した。

子供達もおとなしくそれに従つて、寒い町を三人は歩み去つた。

もう買へない餅の事は思はないやうに、

やつと空気は楽々となつた。

月も雲も動き始めた。さうして凡てが移り動き、過ぎ去つた。

人通りの無い町で、それを見てゐた人は誰もなかつた。

場末の町は永遠の沈黙にしづんでゐた。

神だけはきつとそれを御覧になつたらう

あの静かに歩み去つた三人は

神のおつかはしになつた女と子供ではなかつたらうか

気高い美しい心の母と二人のおとなしい天使ではなかつたらうか。

それとも大晦日の夜も遅く、人々が寝鎮まつてから

人目を忍んで、買物に出た貧しい人の母と子だつたらうか。

※十三銭……当時の十三銭は現在の約三百円に相当。



この詩がよまれたのは、百年近くも前の、日本が貧しいときでした。大晦日おおみそかが越こせるかどうかと、心を悩なやませた人たちも多かった時代です。それにしても悲しく、むなしい情景に心が締めつけられます。物のあり余った今の時代では、想像もできないような三人の親子の姿に、何とかしてあげられないのかと、誰だれしも思おもいます。自分がそこにいあわせたら、そつとお餅もちを買かつて、気をつかわせないように母親の袂たもとに入れてあげるとか、餅屋の主人が気づいて、売れ残りの餅なのだから二人の子どもの手にそつと渡わたしてあげるとか。

人は皆みな、求める物が手に入ればうれしく、自分の願ねがいがかかわなければ悲しいものです。自分の思いだけでなく、他人がうれしいときは自分も気持ち良く、人が苦しんだり、悲しんでいるのを見ると、自分の心しんも沈しずみます。その思いにはいろいろの種類があつて一様ではありませんが、この詩の中の母子のように、ひもじい思いは誰にもある根っこの部分といえましょう。

この詩がよまれて百年近くもたっていて、今はすつ

かり豊かになった社会に住んでいても、胸が締めつけられるのは、時代や、場所を越えて、普遍ふへんに感じる心が人間には備わっているからだと思います。他人の不幸を見て心が痛むのは、他の動物にはない、人間だけがもつ感情でありましょう。人間を他の動物から区別する大きな特徴とくちょうなのだと思います。

寒い大晦日の夜に欲しい餅が食べられない子どもの、お腹の空すいた辛つらさ以上に、それを買かつてあげられないお母さんの気持ちは絶望に近いと思います。それでも作者は、あきらめて黙だまって静かに去っていった親子が、実は神様の化身けしんではなかったのではないかと問いかけて、ほつとする救いの余地を残してくれています。

今、温かい巢であるはずの家庭の中で、子どもをいためたりする暗いできごとが伝えられています。その人たちの心は、絶望という黒い大きな岩にのしかかられ、押しつぶされて、明日を考える余裕よゆうすらないのでしよう。

わたしの家は京都の郊外にあって、子どものころは人家もまばらでした。家のそばにお墓があって、クヌギの木が薄暗くしげっていて、クワガタやカブトムシが集まっていました。虫は欲しいし、お墓は怖いわずいぶん悩みました。怖いのは友人や大人からお化けや、火の玉の話聞かされたからです。子どもの心は感じやすく、怖い話を読んだり、聞いたりすると無性に怖くなります。年を取るとつれて、知識や経験でよろいをまとい、他人の心情にも簡単には共感しなくなります。それでも自分の年老いた親に似た人たちのことや、子どもの世代の事件とか、孫と同じ幼い子どもの不幸には同情します。



われわれは社会にあって、人の立場に立って考えよと教わりますが、しょせん自分の狭い経験を中心に自分の利害の枠の中で行動しているのではないでしょうか。

自己中心の行動をもう少し外に広げて、心の動きを普遍化するには、感動する話や、心の琴線に響く詩歌に、生涯を通じてなじみ、触れることが大事だと思います。

悲しい思いを抱えながら静かに歩み去った親子があまりにもかわいそうなので、神様のお使いかもしれないと作者はほっとさせつつも、人目を忍んで買物に出た貧しい人の母と子だったか、それでも生きていくのだと訴えているのではないでしょうか。

人間は、言葉が通じない動物、象や鯨たちと話ができる。樹や草や花とも話ができる。動・植物だけでなく、「もの」だと思われている岩や水や土や風とも話ができる。

親と子、先生と生徒との間でさえ話を通じないといわれる時代にこんなことを言うのと、とんでもないロマンチストか誇大妄想と思われるかもしれない。しかしそうではない、ほんとうに話ができるのだ。

わたしは一九八九年から撮り続けているドキュメンタリー映画「地球交響曲」シリーズを通して、数えきれないほどのそんな体験を重ねてきた。具体的な例をたくさん挙げて話したいところだがそのスペースはないので、一つだけ例を挙げて、その背後にある仕組みを考えてみよう。

「地球交響曲第一番」に植物学者の野澤重雄さん（故人）にご登場願った。野澤さんは、たった一粒の普通

龍村 仁

のトマトの種から、遺伝子操作も特殊な肥料も一切使わず、一万三千個も実のなるトマトの巨木を水槽で育てた人である。このトマトの巨木は一九八六年のつくば科学万博政府館に展示され、科学技術庁長官賞を獲得した。

わたしは一九九八年、大阪府高槻市にある野澤さんの実験農場で、およそ十か月間かけて種植えから幹の直径十五センチメートル、葉の拡がり直径八メートル、実の数一万三千個になるまでを撮影した。

その野澤さんが撮影に入る前、わたしにはつきりこうおっしゃった。

「龍村さん、トマトには育てている人の心が必ず伝わります。今回は撮影のために育てるわけですから、あなたがトマトと心を通わせて撮ってください。」

当時のわたしは、「トマトと心を通わせる」など、どうしていいか全くわからなかった。しかし科学者と

しても、また人間としても深く尊敬できる野澤さんが
 そう言うのだからすなおに信じることにして、撮影の
 たびに心の中でトマトにあいさつをし、感謝の気持ち
 を送った。

すると不思議なもので、日に日にトマトへの親し
 が高まり、いつの間にか平気でトマトに声を出して話
 しかけるようになっていた。

ところが、十か月目に入ってトマトの成長が極限に
 達し始めたころ、急に別の撮影でイタリアに飛ばなけ
 ればならなくなった。イタリアに着いて間もなく、案
 の定、野澤さんから連絡が入り、トマトの実が落ちて
 しまうので早く撮りに来るように、という指示があつ
 た。野澤さんが指定した限界日は、わたしたちが帰国
 できる日より十日も前だった。

このとき、わたしは一つの賭けに出た。もし野澤さ
 んが言う「トマトにも心が通じる」ということがほん
 とうなら、トマトは待っていてくれるはずだと。

イタリアから毎朝「想い」を送り、帰国して撮影し
 たのが、「地球交響曲第一番」のラストシーンになった
 五千個の真っ赤に熟した実をつけたトマトの巨木の姿



▲「地球交響曲」撮影風景



▲出演者と語る筆者（左）

©龍村仁事務所

である。

この話にはエピソードがある。撮影を終えて帰京した翌々日、野澤^{のざわ}さんから電話があり、撮影を終えた日の深夜から、トマトの実がポトポトと落ち始め、二日後には最後まで残っていた五千個の実がすべて落ちてしまった、というのだ。嘘^{うそ}のようなほんとうの話である。

この話を単なる「幸運な偶然^{ぐうぜん}」と考えるのもいいだろう。しかし、わたしはちよつと違^{ちが}った角度から考え



▲撮影に使われた
トマトの木



©龍村仁事務所

▲映画のパフレット

てみたいと思う。

生きているわたしたちのからだは、物質のレベルで見ると10²⁸個ものさまざまな原子でできている。酸素原子、炭素原子、水素原子等々が集まって分子をつくり、分子が集まって細胞^{さいぼう}をつくり、細胞が集まって器官をつくり、その器官が有機的につながってわたしたちは生きている。いずれにしろ生きているわたしたちのからだをつくっている物質の最小単位は10²⁸個の原子たちである。その原子たちは自分のからだなのだから自分の所有物である、と思うとそうではない。10²⁸個もある原子たちはわずか一年間で九十八パーセントが全く新しいものと入れかわっている。五年も経^たてば、ほぼ百パーセント入れかわっている。五年前のわたしのからだと今のわたしのからだは、物質レベルだけで見ると全く新しいものになっているのだ。わたしたちが自分のよりどころだと思っているからだそのものが実は原子たちの一時的な通り道なのだ。

ではその原子たちはどこから来てどこへ行くのか。

「呼吸^{こそい}」ということを考えてみたい。わたしたちは呼吸を通して大気中の酸素原子を取り入れ、からだを

つくっている物質を燃やしてその廃棄物としてCO₂、すなわち炭素原子を外へ排出している。その炭素原子は、直前までわたしたちのからだをつくっていた物質の一つなのだ。

次に、トマトが生きているとはどういうことなのか。トマトのからだも炭素原子、酸素原子などでできている。トマトは大気中から炭素原子を取り入れ、太陽の光エネルギーで光合成を行って自分のからだをつくり、その廃棄物として酸素原子を外へ排出している。

ところで、わたしが撮影に行った日のことを考えてみてほしい。わたしはトマトの成長ぶりに感動し、感動しながらせせと呼吸して、わたしのからだをつくっていた炭素原子をトマトに向けて排出している。トマトはその炭素原子をせせと取り入れて実、葉、茎をつくっている。すなわち、つい直前までわたしのからだをつくっていた同じ物質が、どんどんトマトのからだをつくってゆくのだ。わたしとトマトは同じ物質を互いに分かち合っている。同じ物質を分かち合っているもの同士は話を通じる、と考えるのが自然なのか、それともそれは、不自然な思いこみ

なのかは議論の分かれるところだろう。

わたしは少なくとも一時的にわたしのからだをつくってくれた原子たちは、その「記憶」を内に秘めるだろう、と直感的に思っている。ただその「記憶」は量子レベルのあまりに微細なものであるがゆえに現代の科学のレベルでは実証できないのだろう。

ただ、その微細な原子レベルの「記憶」に影響を与える道がある。それがわたしたちの「心の在り方」だ。

トマト（自分以外のすべての存在）が好きになり、感動し、感謝しながら関わったとき、その微細なレベルの「記憶」は必ずトマトに伝わる。地球上のすべての存在は四十五億年前の太陽系誕生のとき、地球に集まった原子たちを分かち合い、使い回して生きている。それが、地球（ガイア）はそれ自体が大きな生命体であり、わたしたち人間もその一部分として生かされている、というガイア理論の考え方なのだ。

その考え方をベースにつくり続けてきた映画「地球交響曲」シリーズは、すでに第六番まで完成し、二百万人を超える観客動員を果たしている。

わたしと自然、自然な自由

西島 安則

広みちの柳の並木

わたしは一九二六年(大正一五年)の秋に、京都で生まれました。今も思い浮かべることができる自然の景色は、淡い緑の芽が萌え出した柳の木です。母に抱かれて見上げたこの景色は、不思議なことに、八十年経った今もみずみずしく心に残っています。多分、自然の姿の最初の印象です。府庁前の柳の並木はその広みちで遊ぶ子どもたちをいつも見守っていてくれました。

一九三四年(昭和九年)の九月の朝、京都は室戸台風に襲われました。梅屋小学校の二年生のときでした。わたしたちのクラスのいたのは古い木造の旧館で、机の下に潜っていた皆の上にもすごい砂ぼこりが天井といっしょに落ちてきました。学区の青年団の皆さんに助けられて、コンクリート造りの新館に移り、二階の窓から外を見ると、屋根瓦が木の葉のように飛んでいて、目のすぐ前の柳の老木が、暴風にゆさゆさと揺

れていました。やがて、めきめきとねじれて倒されましたが、裂けた幹の内側の白い木肌が悲壮な最後を語っているようで、胸が痛みました。生まれて間もない幼いときから親しんできた柳の老木はもうなくなりませんでした。自然の猛威を見せられた最初の経験でした。

糺の森の日だまりで

一九三二年(昭和七年)、小学校に入る前の年、わたしは下鴨の社家町にあった親類の家に春から夏にかけて預けられていました。社家町のすぐ近くの糺の森には樗や榎が高々と茂り、いつも少しずつ暗く神秘的な別世界の雰囲気漂わせていました。

その深い森の真ん中あたりに一か所、少し開けた日だまりの空間がありました。そこは、わたしたち子どもたちの自由の楽園でした。思う存分はしゃいで走り回り、ときには地面に横たわって木々の梢と空の雲を見上げ

ながら話し合っていました。森の気が幼い子ども
 の感性を刺激して引きつけるのか、毎日のように森に入
 っ
 てその秘密の楽園の自由をむさぼっていたことを思い
 起こします。糺の森は、この古都の生まれるもつと前
 の原風景を何千年の時を超えて現在に伝えている大事
 な所の一つです。

山背盆地の風土に育つ

京一中に入学したのは、一九三九年(昭和一四年)で
 す。毎日、府庁前の家から中学校(現在の洛北高校)へ
 歩いて通っていました。直線距離では三・五キロメー
 トルほどですが、御所の御苑を斜めに抜けて、鴨川に
 沿って北へ、出町柳から糺の森を通って、北大路へ出
 ると、一面の畑の緑に囲まれて、堂々と建っている薄
 黄色の京一中の校舎はもうそこに見えます。ときには、
 出町柳から鴨川をさかのぼって植物園の南側へ出るこ
 ともありました。帰りの道は、気の向くままに少し遠
 回りをする事が多く、学校から東へ高野川を渡って、
 北白川へ、吉田山、聖護院の辺りから丸太町通に出て、
 西の方の我が家へ向かうこともありました。



通学の途中に川端から望見する比叡山を中心にした東山の稜線と山麓の四季の眺めに、この山背盆地のふるさとに生まれ住むことの幸せをしみじみと味わって



いました。北山の奥深さは若人の心を捕えて、視野の自由な広がり、奥深い探究は独創的な思索へと導いてくれました。東の比叡山と対峙している西の愛宕山の重厚な趣と、その広い麓の丘陵のゆるやかな起伏の襞には、二千何百年もの昔からの渡来文化から王朝文化、そして近世への時の流れと人の情けが宿っています。

三川（桂川、宇治川、木津川）が合流して難波湾へ注ぐ淀川となる大山崎辺りの開かれた南面は、山背盆地の文化へ歴史に生氣を吹きこむ風を通すみちの役割を果たしてきました。

自然の中の自分と自分の中の自然

美しい「自然」の中で、「自由」ということを思索し続けることのできる人生の第一歩を踏み出すことを教えられた中学生時代、それはわたしの一生にとって、もっともたいせつな「時」でした。それは決して過ぎ去った過去の「時」ではないのです。今現在もわたしの「時」としてあるのです。自然は生きています。その自然の命をほんとうに美しいと感じとったとき、そ

れは自分が今生きて行くおおもとの力、すなわち、自分の命となるのです。それは「共鳴」とでもいえると思います。

宗教では、一心に祈って、神や仏と一体となれたときを悟りというのと同じかもしれません。ある宇宙物理学者はわたしに「自分は神の御心を知るために」研究をしていると言いました。ある高名な画伯は「純真無垢なさらの目で一心不乱に対象に向かっていると、いつか彼我合一の三昧境に入り心眼が自然の命を感得するようになる。画はそこから生まれてくる。」と教えていただきました。

人間は太古より、最高のものを継承しつつそれぞれの美の感性によって、その技にさらに磨きをかけ、創造的革新を代々重ねてきました。そして、そのことはそれぞれの人生の最高の喜びでした。

「自然に親しみ、自然を敬い、自然を愛し、そして、自然になる。」これはわたしが中学生のときから今まで求め続けてきました「美と知を楽しむ心」の到達した「固有の成熟」としての自然の自由です。



科学技術の急激な進展により、人間は高度な文明社会を築きあげました。わたしたちは人類の歴史が始まって以来の豊かな社会、長寿社会を享受しています。

しかしその一方で、重大な自然破壊を起こしてしまいました。身近な自然だけでなく、大地や大気、水系を汚染し、地球規模での自然破壊まで進行してしまいました。地球環境問題として一括されますが、地球温暖化、オゾン層の破壊など、どの一つをとってもこのまま進展すれば、人類の未来を危うくする事態を招くに至るでしょう。

この問題に対処する基本的信条として、「人と自然の共生」という標語がよく提唱されます。いい標語ですが、内容をきつちりと理解しないままに安易に使われている場合が多いように思います。それは、「共生」という言葉の意味がよくわかっていないことが原因のようです。では、「共生」とはどういうことでしょうか。



▲ミツバチとレンゲの花

ここで、レンゲ草に登場してもらいましょう。

かつては、レンゲは肥料として田んぼに植えられ、春には花のじゅうたんの上を、子どもたちは子犬のように走り回ったり、花輪を作ったりして遊んだものです。残念ながら今は、レンゲ畑はめっきり減ってしまいました。

いました。

レンゲの花は、一本の長い柄の先に七〜十個の紅色の小さい花がついています。レンゲに親しんだ人でも、この小花をじっくり眺めた人は少ないでしょう。この花は、帆と翼をもった舟の形をしています。舟と呼ばれる舟型の花弁から、翼弁と呼ぶ一対の翼の形をし

た白い花弁が左右に張り出し、舟の端には帆状の赤い花弁が立っています。旗をあげているようなので、旗弁といえます。雄しべも雌しべも見えませんが、

十本の雄しべに囲まれた雌しべと蜜蔵は、舟弁の中に隠されていて、舟弁を開ける秘密を知っているのは、ミツバチなどのハナバチ類だけなのです。ミツバチは、まず、舟弁に止まり、翼弁に両足を下ろし、旗弁に頭を押しつけてふんばると、舟弁が開いて雄しべがミツバチの腹面を叩いて花粉を付けます。蜜蔵の扉が開いたので、根元に舌のストローを突っこんで、蜜にありつきます。こうして、蜜を求めて花から花へ授粉して回ります。皆さんも春になれば、レンゲの花をつみ、ミツバチのまねをしてみてください。舟弁がぼんと開き、雄しべと雌しべが飛び出し、蜜蔵をのぞかせてくれますよ。

共生関係は、鳥と植物にもよく見られます。ハチドリやサンバードは、花の蜜を吸って生きています。鳥類には、ほかにも花と共生関係をもつものはたくさんいます。

哺乳類では、コウモリ類の中に花と共生関係をもつ

ものが多いのですが、おもしろい例を挙げましょう。ドリアンという東南アジア産の果物があります。もつともおいしいとされ、果物の王とまでいわれます。一方で、もつとも臭い果物です。なぜ、おいしくて臭いのでしょうか？

ドリアンは白い花の花粉の運搬者は、昆虫でも鳥でもなく、ヨアケコウモリという小型のコウモリです。パイナップルほどの大きな実は熟して落ちるが、芽は出ません。強烈なにおいをかぎつけて、マレーグマ、ヒゲイノシシ、ゾウやオランウータンなどがやってきて、ごちそうにありつきます。呑み込まれた種は糞となって排泄され、そこで芽が出ます。

ドリアンがどうしておいしく臭いのかかわったと思います。植物の繁殖に重要なことは、授粉と種子散布です。ドリアンはコウモリに授粉してもらい、熟した実から強烈なにおいを出して大型の動物を誘い、おいしい果物を提



▲ドリアン



▲Lewis Carroll "ALICE'S ADVENTURES IN WONDERLAND"
Illustration by John Tenniel

供する代わりに、種子を遠くに散布してもらおうというわけです。

最後に悲劇的な例を一つ。

インド洋のモーリシャス島には、現地名でタンバラコクという常緑の木があります。不思議なことに、すべてこの木は、三百年以上たった大木で、若木がありません。なぜなのか長い間謎なぞでした。

なんとそれは、この島にかつてすんでいた、絶滅したドードー鳥に関係しているのです。

ドードー鳥は、有名な童話『不思議の国のアリス』に登場するおかしな鳥です（この本に挿絵があるので見てください）。くちばしが不釣り合いに大きく、七面鳥を大きくしたような飛べない鳥でした。乱獲によってこの鳥は、一六八一年に絶滅しました。

ドードー鳥はタンバラコクの実が大好きでした。その種はドードー鳥の胃腸を通ることによって初めて発芽するのです。ドードー鳥とタンバラコクは強い共生の絆ゆかりで結ばれていたのです。ところが、ドードー鳥が絶滅したため、タンバラコクは毎年、花を咲かせ実を落としますが芽を出さず、老木だけが残ったというわけです。ドードー鳥とタンバラコクは、運命共同体の関係にあったのです。

さて、今まで共生関係といていたのは、異なった種がお互いに利益を交換する関係を指していました。こうした関係を「相利共生」といいます。

「共生」という概念は、一般的には異なる種が相互に影響し合って共に暮らしている関係をいいます。

そうすると、相利共生以外の共生関係も存在します。例えば、コバンザメという魚は、頭の吸着盤でサメのお腹にくっついて運ばれます。このように、一方だけが利益を得、他方は利益を得ない共生関係を「片利共生」といいます。では、次の場合はどうでしょうか。

カッコウは巣をつくらず、オオヨシキリなどの巣に産卵します。カッコウの雛は早くかえり、オオヨシキリの卵を巣から放り出し、自分だけ育ちます。身勝手極まりありません。この場合は、カッコウは利益を得、オオヨシキリは損をこうむるだけです。これも片利共生の一種です。この関係を「片利有害共生」といいます。

寄生虫の場合はどうでしょうか。多くの場合、片利有害共生の関係ですね。お腹の中の回虫はたっぷり栄養をとり安泰ですが、寄生された人間にとっては害を受けます。

ここまできて、ようやく本題に戻りました。花と動物は見事な相利共生の関係にありました。では、花と人間の関係はどうでしょうか。人間は花をいろんな形で利用し、楽しんでいきます。しかし、花に対しては何

をお返ししているでしょうか。人間と花の関係は、片利共生だということができません。

花を自然に置きかえてみましょう。人間は自然を利用し、自然を土台にして生きています。しかし、自然には何もお返しをしていませんね。つまり、「人間と自然の共生」というとき、それは片利共生の関係だということをしつかり頭に植えつけておかなければならないと思います。

大地も大気も水も汚染し、地球環境問題を起こしてしまつた人間は、今や地球に対して寄生虫的な存在、すなわち片利有害共生的な存在になりかけています。今わたしたちが心しなければならぬことは、人間は母なる自然からの恵みを与えられていることによつて生きていくのだ、という謙虚な心を持ち、自然への深い畏敬の念と愛情をたいせつに育てていくことだと思います。人類が永遠に繁栄していくためには、この理念を守ることしかないのではないのでしょうか。

14 ぼくのだいすきな日本

きゆうき ひさよ
久木 久代

今日、ぼくの学級のトニーが全校生徒の前で作文を読んだ。決して上手な日本語じゃないけれど一生懸命に話していた。ぼくは、トニーがやってきた二年前を思い出しながら、彼のスピーチを聴いていた。

入学式、初めてトニーに出逢った。一目で外国人とわかる風貌に、ぼくは驚いていた。トニーは、ぼくと同じ学級でしかも席も前と後ろだった。彼がどうして、お父さんもお母さんもない日本にやってきたのか、ぼくは知らない。

トニーは、片道十キロメートルの道のりを、毎日休まず自転車をこいで登校してきた。

日本に来て間もないトニーは、休み時間になるといつもぼくについてきた。ぼくは、特に親切にもしなかったし、優しくもなかった。実を言うと、ぼくはどうしたらいいか、わからなかったのだ。ぼくたちの遊びに

とまどう彼を見て、周りのみんなはただコソコソ笑っているだけだった。でもトニーは、大きな目をいっぴいに開けて、ぼくがするのと同じことをしていた。

言葉の通じないトニーは、一人別室で授業を受けることが多かった。たまにいっしょに授業を受けると、ぼーっとしていたり、下を見ていたり、意味もなく騒いだりすることがあった。集中できないトニーのために、授業が中断してしまうこともあった。ぼくはいっしょに騒いでいて、先生に注意されたとき、トニーのせいにしてしまったりもした。トニーはよく友達とぶつかったし、わざと服装違反をしてくることもあった。入学して三か月後の六月、学校音楽祭があった。全学級対抗の合唱コンクールだ。音を外すトニー、わかっている歌詞だけ大声で歌うトニー、そんな彼を見ながら、ぼくたちもわざと音を外してふざけたりしていた。



練習が始まって一週間がたったころ、「男子、ちゃんと歌ってよ！」ついに女子の怒りが爆発したのだ。ぼくたち男子だって最初は、初めての合唱コンクールなので張り切っていた。でも思うように進まない練習にどうしていいかわからずイライラしていたのだ。

どうしてぼくたちの学級にトニーがいるんだろう……せつかくの合唱コンクールなのに……みんな当惑していた。

そんな中、トニーは、意味もわからない日本語の歌詞を一週間で全部覚えてきたのだ。これには、みんなびっくりした。あとで、当日のビデオを見たら、トニーは真剣な顔をして一生懸命に口を開けて歌っていた。

それから、二年間。ぼくは、トニーのいろいろな顔を見てきた。笑っている顔、我慢している顔、寂しそうな顔。でも、今作文を読んでいる顔は、そのどれとも違って見えた。

ぼくのだいすきな日本

ぼくは、日本に住んでから二年になります。

ぼくはフィリピンの小学校にかよっていました。そのときは七十人のクラスで、じゅぎょうをさぼっておこられたことがなんかもありました。でもこの中学校ではだれもさぼらないで、いっしょうけんめいべんきょうしています。だから、ぼくもみんなといっしょに、べんきょうをがんばっています。でも、ちよつとわるいことをして先生におこられるときもあります。

ひるごはんは、いまは、きょうしつできゅうしよくをたべているけど、フィリピンではそとでたべていたので、日本はちよつときゅうくつにおもいました。はじめてたべるメニューばかりだし、フィリピンではやさいをたべていなかったの、やさいがおおいのが、つらいです。でもみんなとたべるきゅうしよくは、おいしいです。

きて一年目のとき、いままてたべたことのない「そば・おこのみやき・たこやき・だんご」を、先生といっしょにつくりました。いまでは、どれもだいすきです。

六月におんがくさいがありました。きよくがむずかかったし、わからなかったけど、ともだ



ちが、よこでずーっとおしえてくれました。みんなといっしょにれんしゅうして、がんばってうたいました。

ぼくは、タガログ語しかしらなかったのに、日本にきてはじめて、「あいうえお」をおぼえました。ともだちや先生におしえてもらって、うたもうたえるようになりました。かんじもかけるようになりました。だから学校のせいかつがとてものしいです。

ぼくは、日本の高校へいきたいとおもっています。だから、もんだいをよんだりかいたりするのがむずかしいけど、いま、がんばってべんきょうをしています。

高校をでてからは、日本にいられるかわからないけど、日本ではたらきたいです。しょうらい、木をきって、ものをつくるしごとがしたいです。

これは、ぼくが「生活」のじかんにつくったぼくの学校のかんばんです。

ときどきフィリピンにかえりたいとおもうときもあるけど、ここにはだいすきなともだちがいるからさびしくありません。ともだちにかんしゃしたいです。

それと、いちばんお世話になっているのは、日本のかぞくです。いつもは、なかなか言えないけど、きょうこの場で言います。「ありがとう！」。

最後まで話し終えると、トニーは照れくさそうにべ

コリと礼をして、足早に自分の席に戻った。

ぼくは手が痛くなるくらい拍手をした。

先日、わたしは京都府国際センターで韓国語講座の講師を勤めた。年々高まる韓国語に対する日本人の関心は非常にありがたい。そのおかげでわたしはふだん気づかなかった韓国語と日本語の類似性に関して考えることになった。

わたしは日本に来てまもなく五年になるが、日本語と韓国語の類似性にはいつも驚く。もちろん日本語と韓国語は似ていながらも微妙に違う部分が多い。とはいえ、両国の言葉はほかの言葉との関係から見ても比べられないほど似ている。

日本語と韓国語はなぜ似ているのか。それは両国の言葉が同じアルタイ語族に属するからであろう。その日本語と韓国語の特徴としてよく取り上げられていることが二つある。

一番目は、中国による漢字文化圏の影響ということである。日本語も韓国語も元々は自国の言葉があつて、



▲ソウルの町並みとハンブル

曹承鉉
チヨ スンヒョン

その上に中国から来た漢字の言葉が加えられた形をとっている。それで、現代の日本語と韓国語の漢語を比べてみると驚くほど発音が似ている。和語はそれほど似ていないが、漢語はほんとうに似ている。

二番目は、助詞が品詞と品詞をつなぐ役割を果たすことである。中国語は基本的に単語だけを並べる仕組みなので、助詞という概念が比較的薄い。しかし、日本語と韓国語は助詞の役割が重要であり、助詞がないと文章が成り立たない。この助詞の発音や使い方も両国の言葉では非常に似ている。

ところが、両国の言葉が全部似ていると思ったらそれは大まちがいだ。それを勘違いし、たまたま韓国式表現を日本語にむりやり当てはめる韓国人がいる。例えば、日本語では「薬を飲む」という表現を使う。しかし、韓国語では「薬は食べる」ものであり、飲み薬すら「食べる」と言う動詞を使う。これは、初級レベルの日本語を勉強している韓国人にとって勘違いしやすい表現だと思う。また、日本語で「背が高い」という表現を韓国語では「背が大きい」という。この表現は少し紛らわしい。先日日本のテレビで見たが、日本



▶ 京都市内の看板



に十年以上住んでいた韓国人がこの「背が高い」という表現を「背が大きい」とまちがって言っていた。この微妙な差をうまく勉強しておけば、日本語あるいは韓国語学習はおもしろくなるだろう。

それでは日本語と韓国語の類似性に関して考えてみたい。例えば、

音楽をきく

음악을 듣는다.

この風邪薬はよくきく

이 약은 잘 듣는다.

「効く」という言葉は「聞く」と発音が同じである。

これは「きく」という本来の日本語があつて、後に漢字を付けて区別したのではないかとわたしは思う。韓国語では聞く・効く両方とも「듣는다 (du t n u n a)」と発音する。ところが、例の動詞の使い方は両国とも全く同じである。

それではほかの例を挙げてみよう。

電話をかける

전화를 걸다.

期待をかける

기대를 걸다.

写真をかける

사진을 걸다.

「かける」という動詞は韓国語では「걸다 (geul da)」になる。しかし、先に書いた例を見たらわかるように、目的語が変わっても動詞の使い方は両国の言葉で全く同じだ。これは一部の例であるが、とにかく日本語と韓国語は偶然だとはいえないほど似ている。日本語と韓国語は昔だけでなく今もその言葉の交流が頻繁に行われている。しかし、どうして日本語と韓国語はこんなに驚くほど似ているのか。その類似性は一言では言い表せない。それは長い歴史の流れから出てきたものであるからだ。

韓国語講座のおかげで、わたしは日本語と韓国語の類似性に関して考えることになった。これから類似性を発見するたびに整理しておきたい。これはほんとうに興味深いことだ。



▲ 韓国語を併記した観光地図

皆さんは、二十一世紀後半に、果たして日本の姿はどうなっているだろうか、と想像したことがありますか。

わたしは、政治、経済、文化という根本的な問題から考えると、このままの調子で進んだならば、日本がふと振り返ったとき、世界中でただ一国取り残されているのではないかと思ふことがあります。

太平洋戦争後、アメリカ社会を豊かな社会の目標として進んできた我が国は、経済発展で世界中が目を見張るほどの成長を遂げた反面、人心の荒廃と精神的な空洞化において世界においても注目され、外国の要人から「かつて日本という国があった。」といわれるような、日本社会に対する見方もあるほどです。

我が子でさえも育てられない親や基本的な善悪の判断を見失った行動を繰り返す若者たちを見ていると、

戦後五十年の教育のひずみがあるまま表面に吹き上がってきたと思わざるを得ません。五十年の間にひずんだ社会を立て直すには、それ以上に相当の時間がかかると思われまます。

しかし、何年かかろうと、日本の皆さんに強く願うことは、温かい人間関係が息づく社会（世の中）をつくる努力を惜しまないということです。

自分が少しでも人よりも優位に立ち、一番を目指すような社会ではなく、これからは一人一人の人間が「ONLY ONE」（かけがえのない自分）として、みんなの中で生かされる世の中こそが実現されなければならぬと思います。

わたしは、かつて海軍特別攻撃隊の一員として戦争を体験しましたが、そのとき、戦場に散華した尊い犠牲者の姿は、いささかも色あせることなく、今もなお、

わたしの胸の内にははっきりと焼きついています。そして、それがわたしの提唱する「一盃からピースフルネスを」の理念の精神的支柱となっているのです。

昭和二十年（一九四五年）五月、沖縄攻撃が激しくなったときに、わたしは徳島県の航空隊に在隊していました。その際にいっしょに飛行機に乗っていたのが、先年亡くなりましたテレビ番組の「水戸黄門」で活躍した俳優の西村晃さんです。いつも共に飛行機に乗って、厳しい訓練を受けました。

それ以前の四月からは、いよいよ出撃命令が下りそうな緊迫した状況でした。そのときは皆で、いっしょに死のうと約束しました。ある日、飛行作業が終わってから、わたしは携帯用の茶籠を持参していたので、五人の仲間といっしょに飛行服を着たままでお茶会をしました。飛行機のかたわらで車座になって、お茶を一服飲んだのです。

そして、仲間の一人が「千な、俺が生きて帰ったら貴様のところの茶室で茶を飲ませてくれるか。門前払いするなよ。」と言いました。わたしは、その言葉がぐさっと胸に刺さりました。出撃したら、生きては帰



▲沖縄・奄美大島・鹿児島交流茶会、和合の茶会（平成18年）

れない。生きて帰れない者同士が、送別のお茶会をしているのです。

そのとき、わたしは無性に母親に会いたくなり、皆に「お袋に会いたいな。」と言うと、皆から「何といくじのないことを言うのか。」という顔をされました。しかし、わたしはすつと立って京都の方を向き「お母さん」と叫んだのです。二、三回繰り返していると、ほかの連中も自分の国の方を向き大きな声で「お母さん」と叫びました。それから一週間後に鹿児島県の串良に移動し、順次命令の下った者が鹿兒島県に出撃していき、皆、大学二、三年生、二十一、二歳の若者でした。きつと、「お母さん」と叫びながら突撃していったことでしょう。

戦後、わたしは、存命中の西村さんとちと沖繩の沖で慰霊祭をし、「お母さん」と叫んだなあと言いながら一盃のお茶を点でて、海中へお捧げしました。すると、不思議なことですが、今まで荒れていた海が静まり、緑のお茶の色が海から漂ってきたのです。

「ああ、皆お茶を飲んでくれたな」と、わたしたち



▲広島被爆60周年 平和と文化を考える集い
(平成17年8月)



▲国連大学にてパネルディスカッション
(平成18年)



▲裏千家ヨーロッパの集い(ローマ) 聖アンセルモ教会での平和祈念献茶式 (平成18年5月)

は、肩かたを抱だき合あって泣なきました。

いつも自分の背後には、亡なくなった戦友がたくさんいます。そして、そういう人たちのおかげで生かされていることをありがたく思うのです。

戦争が人間社会にもたらす計り知れない不幸を地上から永遠に除去するためにも、一盃に平和への祈いのりを深くこめて、平和への誓ちかいを新たにすることがわたしの使命です。

わたしも自分の職業を通じ、一盃のお茶によって世界中の方々に少しでも幸せになっていただけるよう努力しています。

人間とは、何か人様のためになろうという気持ちになったときに初めて塵芥じんがいが取れて、すばらしい自分の構かまえができてくるのではないのでしょうか。

昨年(平成一八年)、相次ぐ談合事件による地方の首長の逮捕がわたしを驚かせました。これらの政治家は逮捕の直前まで異口同音に、自分は清廉潔白だ、事件には何の関係もないと言っていました。が、検察による

取り調べの結果、それがさらぞらしい嘘であることが明白になりました。「嘘つきは泥棒の始まり」ということわざがありますが、平然とさらぞらしい嘘をつく政治家が知的泥棒といってよいこのような罪を犯したのでしょう。昨年はまた、自分の父親や母親を殺すというような少年による殺人事件も相次いで起こりました。そういう少年の犯罪とともに、このような人の模範となるべき政治家の犯罪は、日本の道徳がこれほどまでに地に落ちたかとわたしを悲しませました。

わたしは、宗教というものの意味の一つは人間に道徳を教えることにあると思います。江戸時代の日本人は古くから神々を信じつつ、武士には儒教、庶民には

仏教の道徳が、子どものときから教えられました。明治以後、日本は西洋の科学技術文明を学び、国を近代化してきましたが、長らく西洋人の道徳を養ったキリスト教はほとんど移入されませんでした。

それゆえ、日本人の多くは古くからの神仏も新しい神も信じない人間になりました。そして、その代わりに明治政府から与えられたのは、国家と天皇を神とする国家神道という一種の宗教でした。しかし、この宗教も戦後、連合国最高司令官マッカーサーの指令によつて否定されたので、今の日本では学校でも家庭でも、宗教とともに道徳というものがほとんど教えられていません。世界の中で日本ほど宗教や道徳が教えられていない国はないと思います。

道を行くにも交通道徳というものがあり、これを守らないと事故が起こります。一つの国にも国民が守るべき道徳が必要なのです。それが守られなければたい



▲上村松園 画「母子」 東京国立近代美術館所蔵 Photo: MOMAT/DNPartcom 撮影 ©大谷一郎

へんな混乱が起こります。
 このような道徳の衰えは、宗教とともに道徳が全く教えられないことに大きな原因があるとわたしは思います。「衣食足りて礼節を知る」という言葉がありますが、今の日本人は「衣食余りて礼節を忘れた」といわれても仕方ありません。

とはいえ、わたしはまだ日本の庶民の中には美しい道徳心が多分に残っていると思います。それは日本人が長らく信じてきた神道や儒教や仏教の遺産といつてよいでしょう。その遺産もだんだん少なくなっていくのが心配です。

皆さん、道徳の根源とは何でしょうか。道徳は親、

特に母の子どもを思う心に発するとわたしは思います。母親はまったく無償の愛で子どもを育てます。そしてときにはわが身を犠牲にしても子どもを守ります。このような母の無償の愛によって育てられ、子どもは大きくなるのです。なかには母親が死んだりいなくなったりした子どももいるでしょうが、その場合は誰かが母親代わりになって子どもを育てます。このような愛によって初めて子どもは一人前の大人になることができます。そのような愛を受けた子どもは、大きくなってその愛を自らの子や孫ばかりか、自分を育ててくれた社会にも返すのです。

そして嘘をついてはならないとか、盗んではならないとか、殺してはならないという戒律を守り、精進すること、忍耐すること、人に信頼されることなどの人間としてもつべき徳を積むことが望ましいのです。

わたしは、宮沢賢治を日本でもっともすぐれた作家の一人として尊敬していますが、賢治の童話は、人間ばかりかすべての生きとし生けるものが守るべき道徳を教えてくださいます。生きとし生けるもののなかには絶えず闘争がありますが、賢治は思いやりを忘れるなどいません。そしてときには自分の身を他の生き物のために捧げるといふ利他の行の必要性を賢治は説いています。賢治の童話「なめとこ山の熊」の主人公の小十郎は、熊を殺してその皮と肉を売ることを職業とする猟師ですが、ある日、熊が人間のように言葉を話し、人間以上の道徳をもっていることを発見します。熊が人間以上に美しい心をもっていることに気がついた小十郎は、自分の今までできてき

た行いを反省し、わが身を熊に与えるのです。

賢治は、他の人間あるいは他の生き物のために自分の命を捧げたいという強い願望を終生もっていました。このような利他の行はふつうの人にはなかなかできませんが、人間はやはりこの自利・利他の行をバランスよく行うべきであると思います。皆さんのお父さんや



▲宮沢賢治

© 林風舎

お母さんが一生懸命いっしょうけんめいに働いているのは自分のためのみではありません。それは愛する自分の家族を養うためでもあります。それはそのまま自利・利他の行であるといえます。

今の日本ではもっぱら自利のみを求める風潮が強いようですが、それでは人間の社会は醜みにくくなるばかりです。子どもときから自利・利他の心を養うことが必要です。そうすればおのずから家族を思い、郷土や国を愛する人間になるとわたしは思います。



▲賢治の暮らした岩手の山と湖

心の広場

◇ 心に残った資料や学習

◇ 真剣しんけんに考えたこと、大事だいじだなあと思ったこと

☆ 今までのわたしについて思っていること

きみも身につけよう 社会のマナーやルール

府民ほっとメッセージ(1)

朝一番！
目を合わせよう
「おはよう」と



小さい子
みんなを守る
命かな！



声かけて
交わすあいさつ
地域のきずな



ごみ捨てて
平気な心に
ごみたまる



思いやり
心で話そう
言葉はプレゼント



「ごめんなさい」と
目を見て言える
すなおな心を
育てよう！



一人一人が気をつけよう
やって当然の
マナーとルール



決められた
ルール守れば
マナーもいきる



きみも身につけよう 社会のマナーやルール

ボランティア
人と人との
支え合い



キラキラの 明るい^{えがお}笑顔
いやし系



学
びと
働
きに
一
日
の
食
は



急な雨
ちょっと拝借
人の^{かさ}傘
持ち主が困る姿を考えて



あなたのメッセージをここに書きましょう

--	--	--

第二部

第二部は、皆さんと同じ京都府の中学生が夢や願いをもって、自分のことや周りのことについて書いた作文を載せたページです。

*また、それぞれの作文に対して、「応援メッセージ」が寄せられています。

第二部のあとは「府民ほっとメッセージ」のページです。

皆さんを見守り、励ますために届けられた府民の皆さんの声を紹介しています。

1 わたしのできること

わたしが何不自由なく暮らしている一方で、世の中に目を向けてみると、両親に捨てられ、スラム街で生活をしている子どもたち、虐待を受けて親の元から飛び出し、土管などに暮らしている「ストリートチルドレン」、イラクでは戦争の中で、震えながら生活している子どもたちがおおぜいいる。彼らは、柔らかい布団で寝ているわけでもなく、お腹一杯ご飯を食べているわけでもなく、まして、親の愛情を受けているわけでもない。でも、彼らは思いやり、優しい心をもっている。

その反面わたしたちは、何不自由なく生活しているのに、まだまだぜいたくを望み、人の不幸を何とも思わないところがあると思う。

スラム街の子どもの中には、わたしと同じ年頃の子が、子どもを産み育てている。着せる服もお古で、寝させるベビーベッドもないけれど、思いつきりの愛情

をもつて育てている。

最近のテレビや新聞では、児童虐待のニュースを、毎日のように伝えている。自分が産

んだ子どもを人間としての扱いもせず、ご飯を食べさせなかったり、暴力を振るったり、学校教育も受けさせたりしない。育児放棄を悪いと思わずに、繰り返している現実。わたしは信じたくもないし、信じられない！

虐待から逃れ「ストリートチルドレン」になった子どもは、土管の中で寝たり、空きびんや空き缶を拾い、それを売って生活している。そんなつらくたいへんな毎日なのに「家に戻るよりはいい。」と、彼らは言っている。でも、ほんとうは両親をとっても愛しているのに、親の愛を受けられないなんて、わたしにはとても耐えがたいことだ。

このような、さまざまな現実を知ることによって、



▲ストリートチルドレン（インドネシア）

今わたしは、ほんとうに幸せな生活を送っているんだと改めて感じる。いろいろな現実を知れば知るほど、わたしは何の力もなく手助けもできない存在であることを、思い知らされた。

でも、何かわたしにできることがあるはずだ。

その一歩として、まず募金に協力することを考えた。電話をかける募金システムや、お店に置いてある募金箱に、わたしのできる範囲で、協力するように心がけている。書きまちがえたはがきや使い終わったテレフォンカードも、役に立つことがわかった。兄の学校では、楽器類や文房具などを、海外に送っている。また、少しでもいいからおおぜいの人に、このような状況に置かれている人がいることを知ってもらうために、このように文章にしてみることを考えた。

そしてわたしの夢は、保育士になることである。その中で、もし子どもに何か起こっているなら、そのOSに気づくことができればいいと思う。

わたしの知らないところで、心に傷をもった子どもがおおぜいいるという現実、親の愛を受けずに育った子ども、大人のつごうでいいように扱われている子ども、

飢えに苦しんでいる子ども、戦争の犠牲になっている子ども、わたしはその子どもたちのために、ほんの少しでも役に立てれば、いや、役に立ちたいと思っている。

応援メッセージ

小寺 正一

自分自身や自分の生活を見つめること、自分の周りの人々の思いに心向けることはたいせつなことですね。また自分や身近な人のことばかり考えることもよくありますが、世界各地の人々の生活に関心をもったことも重要なことだと思います。そして、みんなの生活や思いを関連づけて考えることが、国際化の時代にはこれまでに以上に求められているはずです。その上で、みんなのため、社会のために、自分に「できること」を見つけ、やり遂げることが必要です。この資料は、その点を教えてくれます。

それをやり遂げたときの充実感、皆さんにとって大きな「生きがい」となるでしょう。できることから少しでも始めてみましょう。

2 命のたいせつさ



「命のたいせつさ」。人間が、そのことを悟るのはいつなのだろうか。あるときまで、わたしの中でその単語は重みをもっておらず、いつも空中をふわふわと舞っているかのようなだった。

わたしは、小学校六年生のころ友達を一人亡くした。その子はNちゃんといって、同じクラスだったにもかかわらず特別仲がよいともいえず、話をすることも滅多になかった。五年生のとき、Nちゃんはいやがらせをされ出した。初めは男子だけが、Nちゃんにいやがらせをしていた。しかし、だんだん女子までもが、友達同士で無視したりするようになった。Nちゃんに悪いところがあったわけではないのだ。むしろ、Nちゃんはいつでも、誰にでも優しくかった。それはわたしにもわかっていて。だからわたしは、Nちゃんのことを、無視したりしたことは一度もない。けれど、わたしには、Nちゃんを助けてあげることができなかつたので

ある。

Nちゃんがいやがらせを受けるようになって、しばらくたったとき、担任の先生がそのことについての話し合いの場を設けた。いちばんに発言を申し出たのは、わたしの友達の人だった。その子は、Nちゃんを含めた、クラスのみんなにはつきりと聞こえるくらいの声で、こう言った。「Nちゃんは、いつも鼻水たらしてて気持ち悪い。」Nちゃんは鼻炎のため、いつもティッシュを準備していた。わたしは、そのことを聞いて頭の中が真っ白になった。そんなことは、今本人のいる前でみせしめのように言うものではない。耐えかねてわたしがそう言おうとしたとき、先生が教卓を叩いて「鼻水くらいがなんなんや！ 君たちは、そんなことで一人の人間を否定できるんか！」と、涙をポロポロこぼしながらわたしたちに訴えかけた。クラスじゅうが水を打ったように静かになった。Nちゃんが下を向いて顔を真っ赤にして、わたしたちの前で初めて涙を流すのを見ると、わたしは、胸が苦しくなった。それと同時に、どうしてやめよう、と言えなかったのだろうかとうわたしは自分の弱さが情けなくて、もどかし



かった。

このことがあつてから、Nちゃんへのいやがらせは、ほとんどといっていいほど、なくなった。その後も、修学旅行等、楽しい思い出がたくさんできたと思う。にもかかわらず、Nちゃんは学校に来なくなった。先生に聞いてみると、Nちゃんは風邪をこじらせて肺炎はいえんになったということが知らされた。わたしは、そのことを、さほど気にせず、すぐ退院するだろうと思つていた。しかしNちゃんは来なかった。Nちゃんが入院して、数か月たったとき、お母さんに連れられて、Nちゃんが一度だけ顔を見せて学校にやつてきた。教室に入ってきたNちゃんを見て、わたしは驚おどろいた。少しぼつちやりしていた入院前のNちゃんとは、比べものにならないくらいにやせ細ほっていて、ベージュ色の帽子ぼうしからは薬で抜ぬけて、わずかしが残かっていない髪かみの毛がのぞいていた。わたしは、変わり果てたNちゃんの姿を目の前まへにして、ショックを受けた。しかし、わたしは、Nちゃんの姿を学校で見るのは、これが最後となったのだった。

その半年後、Nちゃんは亡なくなった。担任の先生や





校長先生、病院の先生や、家族にみとられてNちゃんは息を引き取ったそうだ。電話でそのことを聞いたとき、わたしは泣いた。感情がこもっているのか、そうでないのかさえもわからない涙であった。同時に、その瞬間にわたしの「命のたいせつさ」という言葉が急に現実味を帯びてきたのである。ホラー映画で山のようにはかれているセリフとは違って、いざ口に出して「死ぬ」という単語を言ってみると、それはガムテープを飲み込んだようにねっとりとした舌ざわりを残して、その単語はのどを過ぎていくようだった。

Nちゃんが死んだ。わたしには、それが信じられなかった。知らせを聞いた後もその事実を

正面から受け止めることができずにいた。しかし、お葬式そうしきのとき、棺ひつぎの中の花で飾かぎられたNちゃんを見ると、Nちゃんの死を痛感せずにはいられず、わたしの目に再び涙あふが溢あふれた。

応援メッセージ

平田 眞貴子

担任の先生が涙をポロポロこぼしながら、クラスみんなに訴うたえかけた場面が心に響ひびきました。みんなに受け止める気持ちがあると信じて話されたのでしょうか。

人は自分の気持ちをわかってもらえるとき、少し元気になります。

寂さびしそうにしている人、つらい仕打ちを受けている人、「助けてほしい」とSOSを出している人が周りにいませんか？

思い切って、声をかける勇気が欲ほしいですね。一人の命、かけがえない命との出会いを生み出せるといいですね。

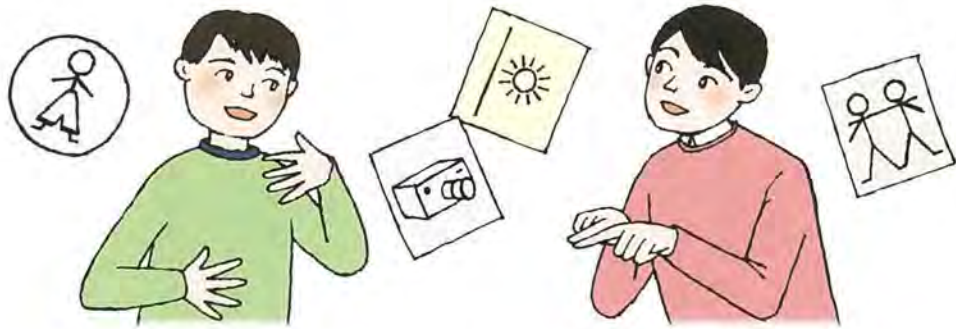
3 弟とともじ

ぼくには一歳いっさい違いの弟がいます。発達の遅れおそか、言語障害があつて特別支援学校に通っています。ぼくがまだ幼かったころ、弟のことで友達にからかわれることがありました。そのたびに「ぼく、お兄ちゃんやめたい。」と泣いて言っていました。母が何も言わず悲しそうな顔をしていたのを今でも覚えています。弟には多動性障害もあつて、買い物中でも家にいても目を離はなすとすぐにどこかへ裸足のまま行ってしまいました。母はそのたびに探し回っていました。弟を見つけると、「無事でよかったです。」と言って、弟を抱だきしめて泣いていました。父も母もいつも弟のことばかり心配したりほめたりするので、ぼくのことは見てはくれないのだと思っていました。

ぼくが小学校一年生の夏休みのある日、両親がとても大事な家族会議をすと言いました。弟が通う学校を決めると言うのです。父と母が意見を出して、いよ

いよぼくの番になりました。緊張きんちやうしたけれどぼくかなりの意見を言いました。三人でいろいろな意見を出し合つて最終的に特別支援学校に決まりました。この家族会議で両親が弟のことだけではなく、ぼくのこともしっかりと考えてくれているのがよくわかりました。家族会議が終わったとき、父も母もぼくも泣きながら笑っていました。弟も笑っていました。

特別支援学校に入学してから弟はだんだん落ち着いて行動できるようになり、一年生の秋には名前を呼ぶと、「はい。」と返事ができるようになりました。それまではほとんど声が出ていなかったものでほんとうに驚おどろきました。それから、「パパ」「ママ」「お兄ちゃん」などとはつきりではないけれど言えるようになり、特別支援学校の言語訓練で教わるマカトンサインも使つて弟と少し「会話」ができるようになりました。今ではほとんどのひらがなを読み書きできるようになった



ので、五十音表を指して自分の思いを伝えられるようになりました。弟は自分の思いが相手に伝わるようになってからは買い物中や家からどこかへ行くこともなくなりました。特にほくの言うことはよく聞くので、母からも頼りにされています。弟は自分の思いを誰にもわかってもらえなくて、伝える方法もわからなくてパニックを起こしていたのかもしれない。

障害がある弟のことを恥ずかしいと思っていたこともあるけれど、ほくに何ができるのかこれからしっかり考えていきたいと思っています。ほくのことを世界

でたった一人「お兄ちゃん」と呼んでくれるたいせつな弟のために。

応援メッセージ

徳川 輝尚

あなたの作文を読み、弟さんの障害でつらい思いをしながら、兄弟の愛を深めていったことに感動しました。あなたがた兄弟の愛を育んでくださったお父さんとお母さんの愛を知ったこともすばらしいことです。感謝しましょう。

人間は、みな、尊い存在です。たまたま障害があるために、弟さんは、言葉がしゃべりにくく、動作もスムーズにできないことがあるかもしれない。でも、一生懸命に生きていく弟さんには、すばらしい光が輝いています。

これからも、弟さんの光を認め、ともに苦しみを乗り越え、ともに輝いていってください。その光は、いつか世の中を照らす大きな光となるでしょう。

4 おばあちゃん

中学三年生の夏休み、病気で入院していたおばあちゃんといっしょに約十日間過ごした。看病している母を少しでも休ませてあげたいという気持ちと、「福祉は好きだから」といった少し軽い気持ちからだった。

でも一方で、わたしは、大好きなおばあちゃんももう長くないと母から聞かされていたので、できる限りのことはしてあげたかったし、自分ができることは何かしたかった。体をふいたり、シツプをはったり、立ち上がるのを手伝ったりした。そんな中で、何よりもいっしょに寝るのはなつかしかったし、おばあちゃんがわたしを頼ってくれるのもうれしかった。

しかし、おばあちゃんの元気がなくなっていくのを目の前で見るのは、とてもつらいことだった。だから、わたしなりにがんばったつもりだったけれども、しばらくして看病をやめたいと思ったし、夏休み中から始めていた体育祭の取り組みをできるだけ遅くまでやって、学校からなかなか家に帰らないようにもしていた。

そういう感じで夏休みは終わっていった。

九月に入り、再びおばあちゃんの入院生活が始まった。

晩秋のある日、家に帰ると、

何台もの自動車があった。「何だろう？」と思いながら家の中に入ると、会社にいるはずの父と母、おおぜいの親戚の人たちがいた。部屋の方を見ると白い布団が敷いてあった。わたしはすぐにわかった。

「おばあちゃんが死んだんやな。」って。

顔を見たら真っ白で、おばあちゃんが小さく見えた。夏休みにわたしといっしょに過ごせたことをおばあちゃんが喜んでいたら、近所のおばちゃんから聞いて涙がとめどなく出た。わたしはすぐに学校に行き、先生の顔を見て、また泣いた。おばあちゃんが死んだということを信じられないんじゃないやなくて、信じたくなかった。

お葬式そうしきのときは昔のことを思い出していた。おばあ



ちゃんに毎日保育所の送り迎えをしてもらったこと、いっしょに畑仕事をしたこと、小学校六年生までいっしょに寝ていたこと、けんかをして布団を離して寝たこと、二人で夜更かしをしたこと、母に家を追い出されたときに助けてくれたこと、二人でゲームをしたこと、運動会や体育祭に来てくれたこと、夏休みにいっしょに過ごしたこと、そんなことを思い出していた。

(夏休み、どうしてわたしはもつとがんばれなかったんだろう)

少しでも嫌だと思ってしまうこと、やめたいと思ってしまったことが、とても情けなかった。大好きなおばあちゃんなのに、なぜ……という気持ちでいっぱいだった。自分もつとがんばっていたら、おばあちゃんは今もまだ生きていたかもしれないのに……とまで思った。それだけに、あのときの自分に「介護」についての知識があれば、何か違ったかもしれないという悔しさみたいな、悲しさがあつた。そんな気持ちには誰にも話せなかった。

父や母に、「つらかった。嫌だった。」なんて話せるわけがなかった。父や母はわたしに、「夏休みはよくがんばってくれた。ありがとう。」と言ってくれた。おばあちゃんも、そして父や母も「ありがとう」と言っ

てくれたけど、わたしは何もしていない。ただいっしょにいただけなのに……。お礼を言われたとき、わたしは「ごめんね」と言いたくなつた。何もできなくてごめんね……。と。

応援メッセージ

山折 哲雄

おばあちゃん子だったんだね。それで、君もおばあちゃんが大好きだった。

だから、甘えん坊だったこともあるんだ。わがままを通したことも、ね。けれどもそんなときでも、君がおばあちゃんを好きだという気持ちだけは、まちがいなくおばあちゃんの心に届いていたと思うよ。そこがいちばんたいせつなところではないだろうか。

ほくも君ぐらいのとき、おじいちゃんを看病したことがある。けれどもほくはそのおじいちゃんが少し恐く、好きになれなかった。それを思うと、少し悲しい気持ちになるのだけれど、それにくらべると君はとても幸せにみえるよ。だって君はおばあちゃんが好きだったんだから。

5 やさ 優しさのチャンス

わたしたちは、ついつい「明日にしよう」と言っ
てしまう。思いついたときにやればいいのに、「つい」
先延ばしにしてしまう。そうすることで、一時的に心
を休ませるのだ。

以前に友達と口げんかをしたことがあった。小さい
ときから口が達者だったわたしは、言わなくてもいい
ようなよけいなことを言ってしまった。なんとかして
相手を負かしたかったのだ。そのとき、その子は反論
しなかった。だけどそれは「負けた。」と悟ったから
ではなく、「傷ついたから」だった。幼かったわたし
は、そんなことにも気づかなかった。

あとから、やっぱり言い過ぎたのかなあと思ったも
のの、「謝る」という行為が照れくさくて、「明日謝ら
う」と結論を出した。お得意の、「明日にしよう」と
いうやつだ。

ところが、なかなかすなおになれないのが子どもら
しいというのか幼い。明日、やっぱり明日と思ってい
るうちに、どんどんときは経ち、しだいに勝手な責任

転嫁を始める。「向こうだって
同じようなことを言ってたし、

お互いさまだよ。わたしだけが悪いんじゃない。」そ
んなふうに分で自分に言い訳をして、なんとか自分
を正当化させる。そして安心する。一種の自己満足な
のだろうか。その後、事態はさらに悪化。ときが経っ
てしまっているものだから、ますます思い込みは深ま
る。「きっとあの子はもう忘れただろう。」と、わたし
は決めつけていた。現実は今、わたしはその子とまだ
仲良くやっている。だけど、それは決して傷を忘れた
からではなく、その子の心が広いだけだと最近気づい
た。気づくきっかけとなったのは、わたしが似た経験
をしたからだだった。

ある日、わたしは腹の立つことを言われた。だけど、
だんだん怒りは悔しさに変わり、ちよつと落ちこんだ。
がらにもなく傷ついたのだ。でもおそらく相手は、何
気なくその言葉を言ったのだろう。あのときのわたし
のように……。そして、きっとそのうち忘れさると思っ



ているのだろう。あるいはもう言った本人が、忘れてしまったかもしれない。

傷つけられた側の痛みは、簡単には消えない。まして、いまだにこうして覚えているわたしのような執念しやくねん深い人間なら、なおさらだ。だけど問題は、その傷をどうするかだと思ふ。消毒もせずに放っておけば、きつとまた同じようなことを、ちがう人に言うだろう。八つ当たりのような形で……。それでは全くの無意味だ。傷つき損である。損することが嫌いなわたしは、こう考えることにした。「傷はチャンスだ」と……。

例えば十人の人が心に傷を負ったとする。その人たちが一人につき一人、誰か別の人と同じ傷をなすりつけたとすると、傷を負った人が二十人になってしまう。これでは「大損」だ。

では逆に、その十人が傷をバネに、一人一つずつ優しい言葉を、誰かに言ったとしたらどうなるだろう。うれしい気持ちになる人が、十人もできることになるではないか。自分以外の人を傷つけることなく、そのうえ、うれしい気持ちになる人が増えるなんて……。優しくなれる「チャンス」ではないか！

必ずしも、いつもいつもそんな悠長なことを言っていられるわけではない。泣きたいときだってあるし、

思いつきり落ちこむときもしよつちゅうある。だけどそんなときは、わたしは人の悲しさがまた少しわかるようになったのだという自信へと、変えるようにしている。とりあえず、今わたしにできることは、「明日にしよう」をやめること、人を傷つけたと気づいた時点ですなおに認めて謝ることだ。それからもう一つ、自分の傷を、誰かに押しつけるのをやめること、それが優しさを見つけ見つけるいちばんの近道だと思ふ。

応援メッセージ

小寺 正一

「優しさのチャンス」というキーワードがとても魅力的ですね。人間は誰でも心の中に弱さやずるさを秘めています。理屈では十分理解しているつもりでも、その思いをすなおに相手に伝えることに対しては、ためらったりすなおに実行できなかつたりするものですね。だけど、そういう自分を冷静に見つめて、ふだんから「優しさ」を示す「チャンス」をつかもうと心がけることは、とても頼もしい生活態度だと感じました。互いに小さなチャンスを生かし合うことで、人と人との関係はずいぶん温かいものとなるでしょう。

6 わたしだけの空

中学生が情熱をかたむけるもの。勉強、スポーツ、遊び……。中学生の代名詞ともとれる言葉だ。わたしも、わたしの仲間もこれらにずっと情熱を捧げてきた。だが、わたしはこの夏、ひと味違ったものに没頭した。夏休みの宿題の定番、そう「作文」だ。なぜわたしち中学生が皆嫌っている作文にわたしが熱中したのか。それは本というものに出会ったところにさかのぼる……。

わたしがなぜ本の世界に引きこまれたのか。それはわたしすら覚えてはいない。だが小学生から中学生という環境の変化からか中一のとき中学校の本棚にある興味のある本をかたっぱしから読みあさった。そのころのわたしは仲間には明るく接していたが、陰では上下関係や部活などの悩みで孤独を感じ、自分はどうしてこうなのか、どうしてあるときああしてしまったのか、などと毎日自分を責め続け、自信をすべて失ってしまっていた。そんなとき出会った一字一字の活字たちが、中学校という環境の変化で枯れかかってしまっ

たわたしの心の花にうるおいを与

え、少しずつだがわたしをいやしてくれた。そのころのわたしにとっても、今のわたしにとっても、本とはどんなに嫌なことがあっても本を読んでいるときだけは忘れられる、いわばわたしの心の避難所だったのかもしれない。しかし、本は安心させてくれるものでもあるが、人生の道しるべと言ったらいいのだろうか、わたしが人生の道でつまずいたとき、どのようにすればいいか手を差し伸べてくれるのだ。最近『ハートボイス』という本を読んだ。その本にこんな言葉がある。「将来どんな職業に就きたいかだけでなく、どんな人間になりたいかというのがたいせつだ。」どんな人間になりたいのか、自分に自信がもてなかったわたしにとって、その言葉はあせらなくてもいいよと背中を押してくれようだった。

わたしが筆者との心のキャッチボールで得たものは多く、人としての成長もそうだが本を読むことによっ



て、わたしは作文という新たな自分を表現する術を見いだしたのだ。

三年の夏。わたしは京都府の主張大会へ出す作文を書いていた。そのとき、ふと大きな疑問が浮かんできた。なぜわたしは作文を書くのだと。人に伝えるため、自分のため。このときこう思った。人に伝えるために。自分の想い、主張を一人でも多く聞いてもらい、共感し、語り合いたかった。でも実際に人に伝えるなどということはたやすいことではなかった。いろんな視点からものごとをとらえ全体を見渡さなければならぬ。そして言葉を練りに練った。書き終えるのと同じ時に達成感と安堵のため息がもれた。

本番は緊張などしなかった。わたしはわたしだけの空を飛んでいるように自分の言葉で人に伝えることができた。発表しているときがわたしにとっていちばんすなおに自分を表現できると感じたときだった。そして、わたしはその主張大会で入賞することができた。勉強でもスポーツでも頂点に立つことはできなかった。賞状とたてをもらったとき、わたしは初めて人に認められた気がした。

人はよく人に伝えるために書く、という。わたしも

前はそれを前提として文章を書いていた。しかし、この作文を書くにあたって考えが変わった。もちろん今も自分の想いを伝えることで自分を理解してもらいたい、こんな自分の想いをすなおに文字にするとき、ほんとうの自分が見えてくるとわたしは信じている。そして、誰もが自分だけの空をもっているのだと。だから自分は今何を想い、感じているのか確認するために書き続けていたい。そしてそれを秘めておくのではなく言葉で表現していききたい。そうすればわたしはわたしだけの空をずっと飛ぶことができるだろう。言葉という大きな翼で……。

応援メッセージ

中西進

自分の体験をしっかりと踏まえて歩いてきた、心の軌跡が力強く語られていて、すばらしい作文だと思った。著者と対話し、出会った言葉をたいせつにする。そのことで生き生きとした世界を見つけた筆者は、日常的な生活とは違う、もう一つの世界が人間にはあることに気づいたことだろう。それを「空」だと思ったのがうれしい。少女よ、その空の限らない彼方に向かって、羽ばたけ。君は大空の渡り鳥になれる。

7 体育大会優勝に向けて

「いろいろ問題があるので体育大会の活動は学校外では禁止にします。」体育大会まで一週間を切ったとき、担任の山川先生は、クラスのみんなにこう言った。わたしのクラスは、結構まとまりもよく、今度の体育大会でも、優勝をねらっている。赤ブロックは色も縁起がいい色で一昨年から連覇している。なんとといっても集団競技の得点が多いので大縄跳びや綱引きの練習では気合いが入っている。今日のブロック活動の大縄跳びの練習では、隣で練習していた青ブロックにかなりの差がつけられていた。もう学校の練習では時間もないので、放課後来られる人だけでも集まって練習しようかということとを相談し始めていたときのことだった。

山川先生がいないうちにみんなに声をかけた。「明日から、体育大会前日まで、中央体育館前の広場で大縄跳びの練習をしたいと思います。練習したら絶対勝てると思うのでなるべくみんな集まってほしいと思



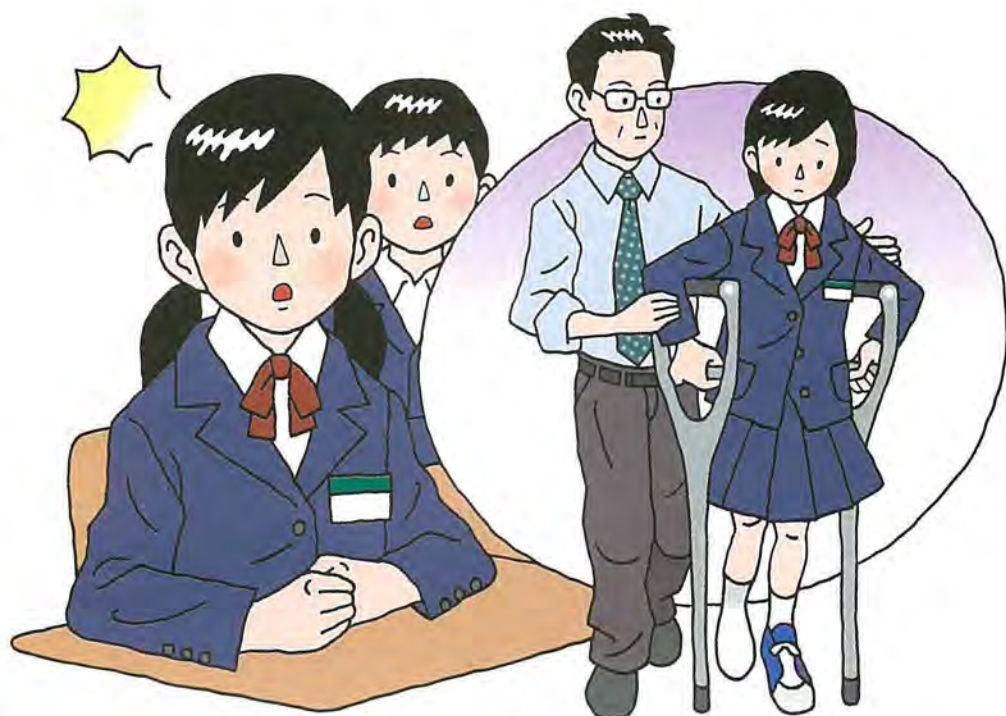


ます。時間は七時から八時までです。」「でも山川先生は学校外での練習はだめだって言ってたやん。」「問題にならへんかったらいいんとちがうの。要するに近所迷惑とか夜遅くまでやらないとかやし、騒がずに、時間を決めてやればええやん。」「わたし、塾あるし、毎日は無理や。」「できるだけでいいし、でも、なるべく多いほうが練習になるからたくさん参加してほしい。」「クラスではだめと言われたことをするのはよくないという声もあったが、優勝したいという思いの声と問題にならないように注意すればよいという意見に押されて、明日から秘密の練習が行われることになった。

次の日の夜、多くのメンバーが集まった。かなり強引に決めたことでもあったから心配していたけれど、これだけのメンバーがやる気になってくれていることにとても力強く思えた。その中にはふだんあまり目立たない直子の姿もあった。わたしは、こうやってみんなを集めたことにますます自信をもった。「じゃ、練習しよう。なるべく、うるさくならないよう静かにやろう。そして、早く帰る人は、帰っていいからできる人だけ残ってやるだけやろう！」練習はとて面白い雰

困気いきですることができた。この調子でがんばれば、必ず隣となりのブロックに勝てる。ますますわたしはうれしくなった。そして、予定通り八時前に、みんなに寄り道をしないように言って解散した。何も問題もないはずだった。

夜練習の次の日。学校へ来てみると、たいへんなことを聞いた。「ねえ、直子なおこのこと聞いた？ 昨日、練習から帰る途中とちゆうで自転車とぶつかってけがをしたらしいで。」「うそ、それで直子はだいじょうぶなの？」「一応だいじょうぶらしいけど、ちょっといろいろまずいことがおこっているねん。」「まずいことって……。」
そうこうしているうちに、山川先生が、直子なおこを連れて、教室に入ってきた。直子なおこは松葉杖まつはづえをついていた。わたしは呼吸が止まりそうになった。「山川先生にばれてしまったかな……。」「やばい。」「ほんとは直子なおこのことを気にしなければいけないのに、そんなことばかり考えて落ち着かなかった。そして、直子なおこが席に着くと山川先生は静かに話し始めた。「昨日、みんな禁止とっていた学校外での練習をしましたね。直子なおこさんはその帰りに急いで家に帰ろうとして事故にあいまし



た。「ばれたー」まずそう思った。「直子も事故なんかするとは……。」みんなのやる気が一気になくなってしまう。

山川先生は続けた。「実は、直子さんは昨日、塾を黙って休んで、練習をしていたそうです。それで遅くなつたので急いで帰ろうとして事故にあつたのです。

おうちに連絡があつたとき、塾とは全く違うところだつたので、ご家族の方はとても心配されたそうです。けがそのものはないことありませんでしたが、うそをついて心配、迷惑をかけたことがとても大きな問題なのです。」知らなかつた。直子は家のことはだいたいようぶと言っていた。だからそんな直子のことなんて気にもしなかつた。「ほかに、おうちの人にちゃんと問わずに練習に行った人がいますね。手を挙げなさい。」数人の生徒が手を挙げた。びっくりした。こんなに多くの友達が無理をしていたなんて考えもしなかつた。わたしは決して自分のわがままですすめたわけではない。クラスのためを思つてしたことだつた。そして、直子は泣いていた。おそらく自分のせいで練習がばれたと思い、責任を感じているのだろう。責任。

じゃあ練習をしようと言つたわたしは、どんな責任をとればよいのだろうか。そして山川先生は、わたしたちのどこがいけなかつたのかをゆっくり話してくれた。わたしは泣きそうだった。先生の言うことはとてもよくわかつた。とにかく直子に謝らなかつた。

応援メッセージ

小寺 正一

この話、よくわかります。禁止されていても、少しくらいならいいよ、問題にならなければいいよ、という気持ち、よくわかります。

筆者はクラスのためを思つて、リーダーシップを発揮しています。学校外での練習にもおおぜいが参加したことは、クラスの熱意とまとまりのよさを感じさせます。見習いたい点がたくさんあります。しかし、考えたい点もいくつかあります。「先生は、わたしたちのどこがいけなかつたのかをゆっくり話してくれた。」先生の言うことはとてもよくわかつた。」と書かれています。どこがいけない、とわかつたのか、その理由は何か、いろいろな点から考えてみるといいでしょう。

8 平和のためにできること

「平和」。たった二文字のこの言葉の重みを、わたしは今強くかみしめている。

わたしは二〇〇二年三月、NGO「国境なき医師団」の教育プロジェクト「子どもレポーター」としてカンボジアに派遣された。好奇心につき動かされ、勇んで旅立ったものの、倒れそうな暑さ、周りにあふれる聞いたこともない言葉……初めての環境にたちまちホームシックにかかってしまった。そんなわたしを救ってくれたのは、優しいカンボジアの人々だった。どんなときも、彼らは太陽のような明るさでわたしを照らしてくれた。けれども、彼らの明るさは、過去の悲しい歴史と、現在の苦しい生活を受け入れた上での明るさだということ、取材を進めていく中で知った。過去二十年にもわたる内戦の傷跡は、その終結後十数年が経過した今も、人々の暮らしに大きな影を落としている。取材で訪ねた自立支援施設で出会った子どもたちのう



▲NGO 運営の学校で勉強するカンボジアの子どもたち

ち、幾人かが人身売買の被害にあった体験を語ってくれた。我が子を手放してしまわなければならないほど、貧困に苦しんでいる人々がこの国にはおおぜいいる。悲しい体験を振り回すように、彼らは未来を夢見て、自分の力で生きるための糧を得るべく、勉強に職業訓練に励んでいた。過酷な状況の中、明るく力強く生きる彼らは、わたしにたくさんのお話を教えてくれた。

帰国後、幸いなことに新聞・ラジオ・テレビ等のマスメディアがわたしの体験を取り上げ、報道して下さった。こうして広報活動の第一歩を踏み出せたわたしは、学校でも全校生徒へ向けて報告する機会に恵まれた。「平和のたいせつさについて改めて考えさせられました。」「自分たちにもできる何かを始めよう。」「全校のみんなから寄せられた感想は、わたしの話に真剣に耳をかたむけ、それぞれの想いを込めて綴ってくれたものばかりであった。その後、学校内の生徒会組織である「国際交流委員会」に入会したわたしは、さらなる感動に出会った。この会が毎年行ってきた発展途上国への支援物資の収入や募金活動において、この年の集まりは以前のどの年よりも多かったのである。



▲対人地雷を探知機で調べている様子（タイ）

学校関係者だけでなく、新聞などを通して、わたしたちの活動を知ってくださった地域の方々のご協力があったためだった。わたしが話した「カンボジアの今」について関心を寄せてくださったのなら、これほどうれしいことはない。遠い国の歴史や文化、人々の暮らしを知ることが国際協力の原点だと教えてくださったのは、学校の仲間や地域の方々にはかならない。相手への正しい理解があつてこそ初めて、心の通った援助ができることを周囲の人々の姿勢から学んだ。「知る」ことのたいせつさに気づいたわたしたちは、新しい取り組みとして「地雷廃絶キャンペーン」を開始した。「地雷が埋まっている国は、カンボジアをはじめ、約七十か国にも上り、その国々の復興を大きく妨げている。この重要な問題にも目を向けてもらおうと、自作の紙芝居の上演活動を始めたところである。

カンボジアへの旅から二年足らずの間に、わたしはたくさんの人と出会い、多くのことを学んだ。常に周りの人々に支えられていることに心からの感謝を忘れず、かけがえのない「平和」のために努力し続ける人間になりたい。



わたしは、世界平和を願うとともに、茶道の「和」の精神を伝えるため、世界各地を訪問しています。

そして、今、わたしが皆さんにいちばん伝えたいことは、わたしが行く所集まる人々の笑顔、和らぎをもった接し方こそが、学校でのいじめを根絶し、また、家庭から失われつつある安らぎとお互いの信頼を回復するためにもっとも必要なことである、ということなのです。

この作文を読み、一人の生徒が社会生活の中でたいせつな感謝の心を忘れず、「平和」のために一生懸命に努力している姿勢に深く感動しました。これからも、「和」の心をたいせつに、皆さん

が、また、皆さんの子や孫が、「ほんとうに日本に生まれて良かった。」と思えるように、平和への取り組みを忘れず、勉強やスポーツに励んでほしいと思います。

友情や家族の愛に欠かすことができない信頼関係をたいせつにしていくことは、それを崩すことより何倍ものエネルギーが必要ですが、今の日本の教育には、全身からそのエネルギーを発し、信頼関係を築き上げていくことが何より大事なのです。

そうすることにより、日本の未来は必ず開けると確信しています。

心の広場

◇ 心に残った資料や学習



◇ 真剣しんけんに考えたこと、大事だなぁと思ったこと



☆
今までのわたし、
これからのわたしについて
思っていること

一生懸命^{けんめい}、道のごみを拾っている子どもたち。自分が出した物じゃないけど町がきれいになるのは気持ちが良いこと。大人も見習ってゴミのない美しい町にしたいものです。



先日のラジオ体操で体操参加の印^おを押してもらった中学生の子が、元気に「ありがとうございました」と返事をしてくれてとってもさわやかな一日のスタートとなりました。それを小学生の子たちが見たり聞いたりして、あいさつの和が広がりました。



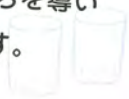
好きな人はいますか…。お父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃん、兄弟、姉妹。友達？近所のおじさんおばさん、先生……。あなたがだれかを好きな分だけ、あなたもだれかに愛されてるよ！



クリーンキャンペーンの日、おとなに混じってごみ拾いに歩く子どもに出会いました。また通学の途中、自転車を止めてごみを拾う中学生に出会いました。子どもたちのこの行為はとても美しく輝いて見えました。すがすがしい気持ちにしてくれた子どもたちに感謝しています。



おはようございます。スポーツのクラブをしているのでしょ、丸刈り頭の男の子（中学生）。朝のあいさつに老いた心もさわやかになります。地域の誉れです。次世代を担う立派な青年に成長し多くの子どもたちを導いてくれることと思ひ、願っております。



府民ほっとメッセージ(2)

ごんなすてきな
子どもに出会いました

きょうと 京都府案内



とびらの回へ

「わたし」が「わたし」として
この世に生まれてきたことを
自覚したのは何歳のころだろう
気がつけば わたしたちは
この世に人間として誕生していた
自ら「生きている」というよりも
わたしたちの到底及ばない
大宇宙の摂理の中で
「生かされている」と
考えたほうがいいのかもしれない
わたしたちは互いに
二度と返らぬ「いま」を生きている

人間として生まれたこの人生を
人間として幸福に生きていきたい
誰もが願うこのことは
人類永遠のテーマだろう
ただ言えることは
人間だけ都合よく生きようとしても
自分だけ幸せになろうとしても
けっしてそれは
うまくいかないだろうということ
これからわたしたちは
まわりの人々と、自然や環境と
どのように関わっていけばいいのかを
一人一人が考え合って
未来に向かって
踏み出そう

京の子ども 明日へのとびら【中学校編】

● 執筆者

山折哲雄
伊藤謙介
中村桂子
上田正昭
澤田淳
向山ひろ子
梶田真章
稲盛和夫
廣瀬量平
村田純一
龍村仁
西島安則
河合雅雄

久木久代
曹承鉉
千玄室
梅原猛
小寺正一
平田眞貴子
徳川輝尚
中西進

● 挿絵・図版

中久保けい子 JT生命誌研究館(画:橋本律子)
角田正己 長谷川容子 ホンマヨウヘイ
よしのぶもとこ 森田みゆき きたむらイラストレーション
奈路道程 植田愛子 永井ひろし

● 写真

アルピナ PANA ネイチャー・プロダクション
毎日フォトバンク 龍村仁事務所 OPO
茶道裏千家淡交会 淡交社
東京国立近代美術館:上村松園 林風舎 時事

発行日 平成 28 年 3 月 31 日

発行 京都府教育委員会

〒 602-8570 京都市上京区下立売通新町西入

© KYOTO PREFECTURAL BOARD OF EDUCATION 2007



Copyright © 2014 by VEGETABLE OIL INK

1年	組	
2年	組	
3年	組	